

阿難と鬼子母

逍遙著



刊社望及物書



古くは

河内守

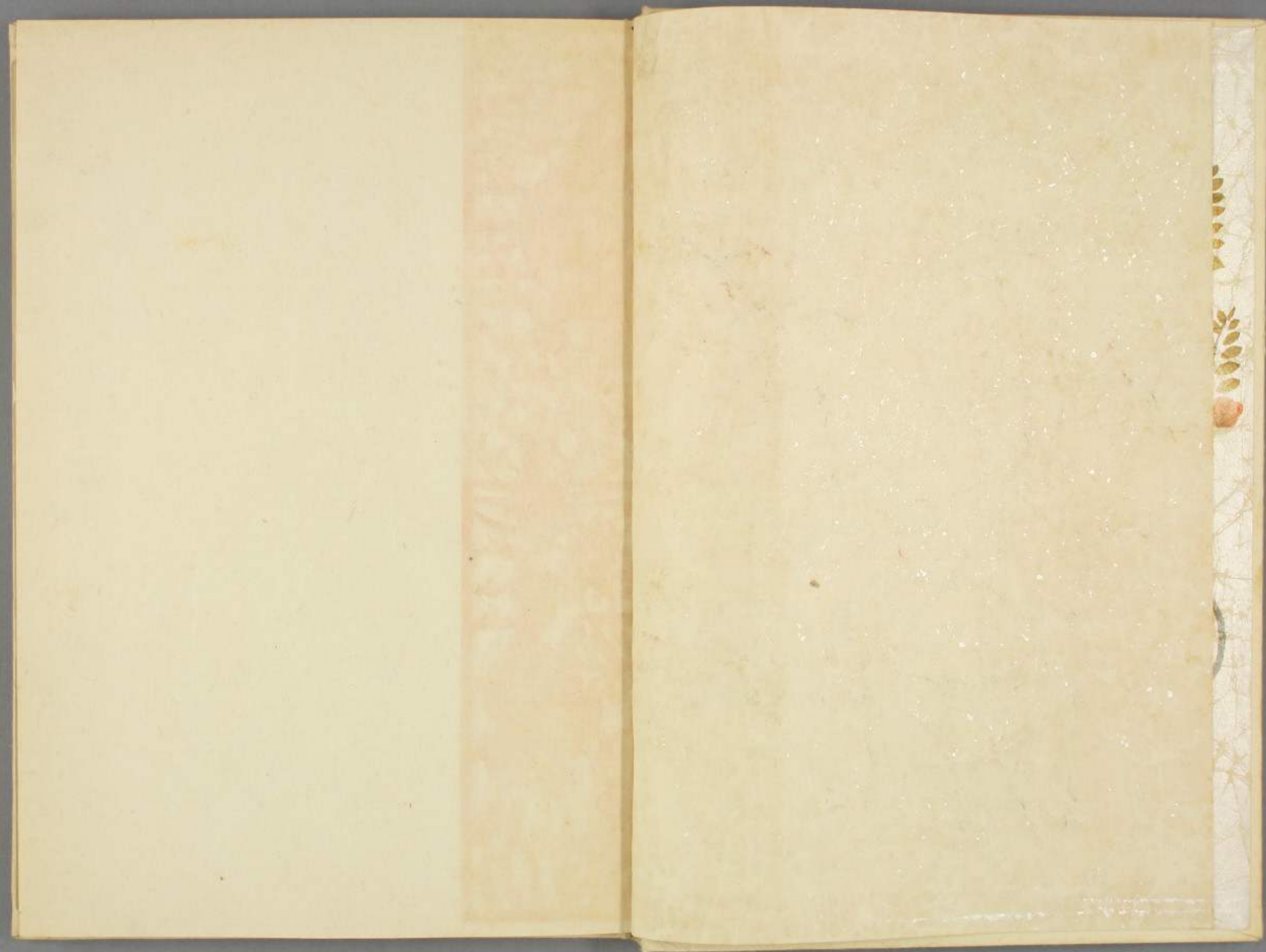


阿難と鬼子母

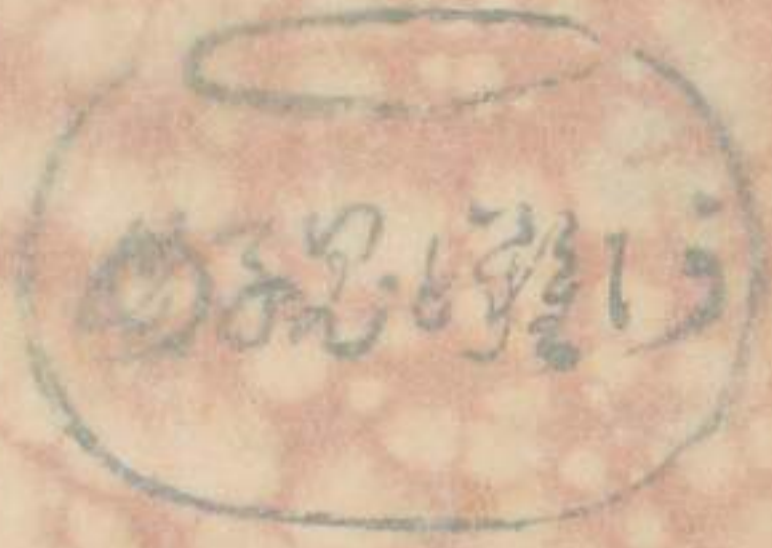
逍遙著











双
物
言
八



7

子規啼血

双

物



子規

八

Blank page with a faint vertical border on the left and a faint circular mark in the center.

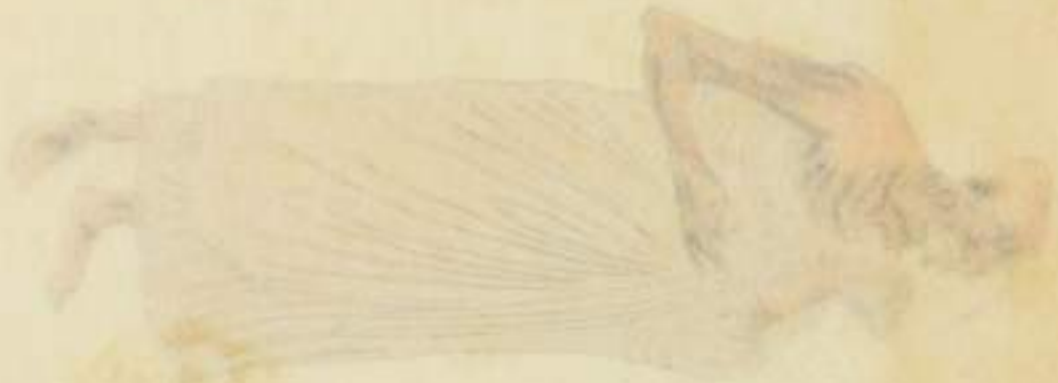
SHUNYU



SHUNYU



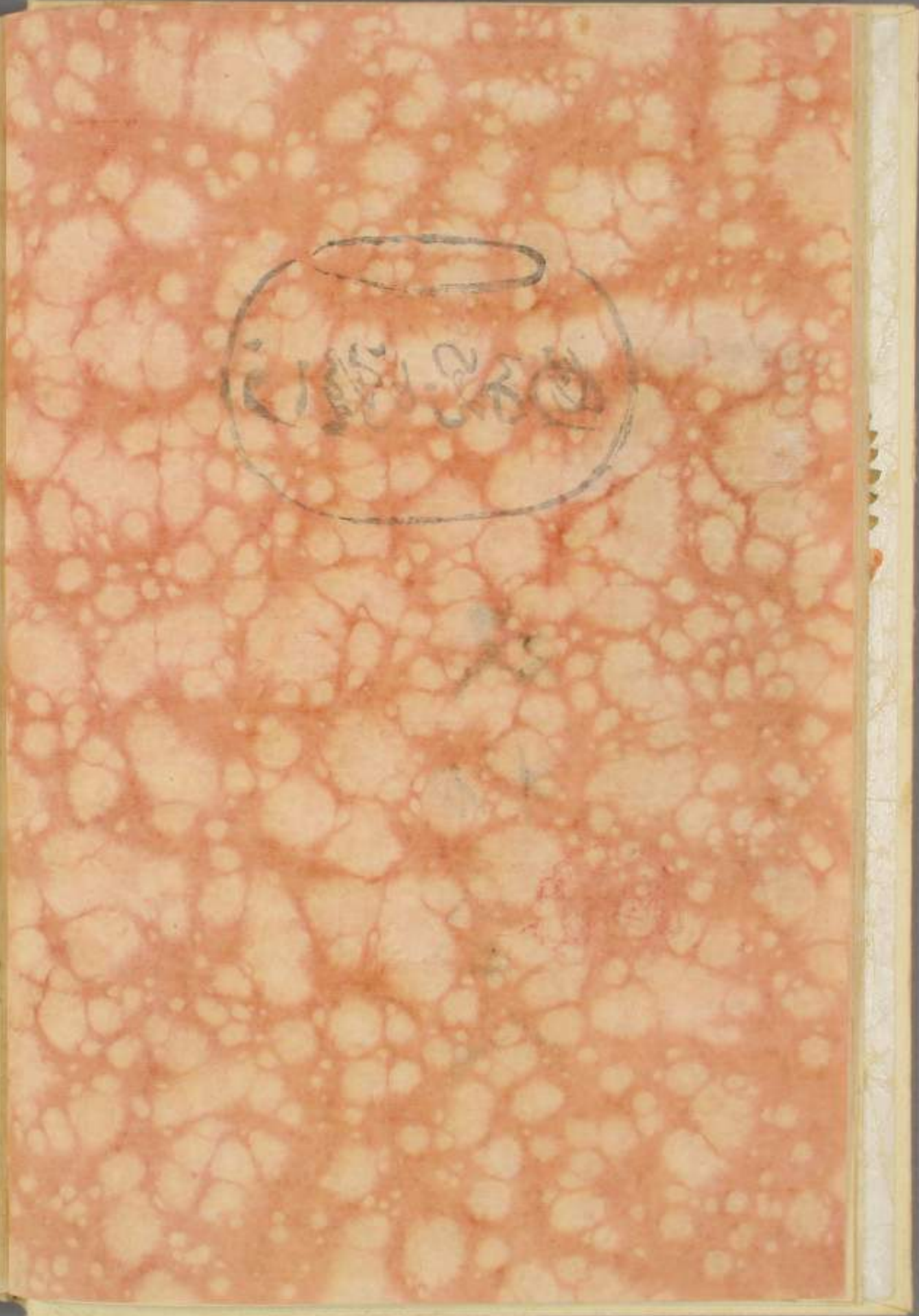
SHUNYU



SHUNYU



SHUNYU



提提部



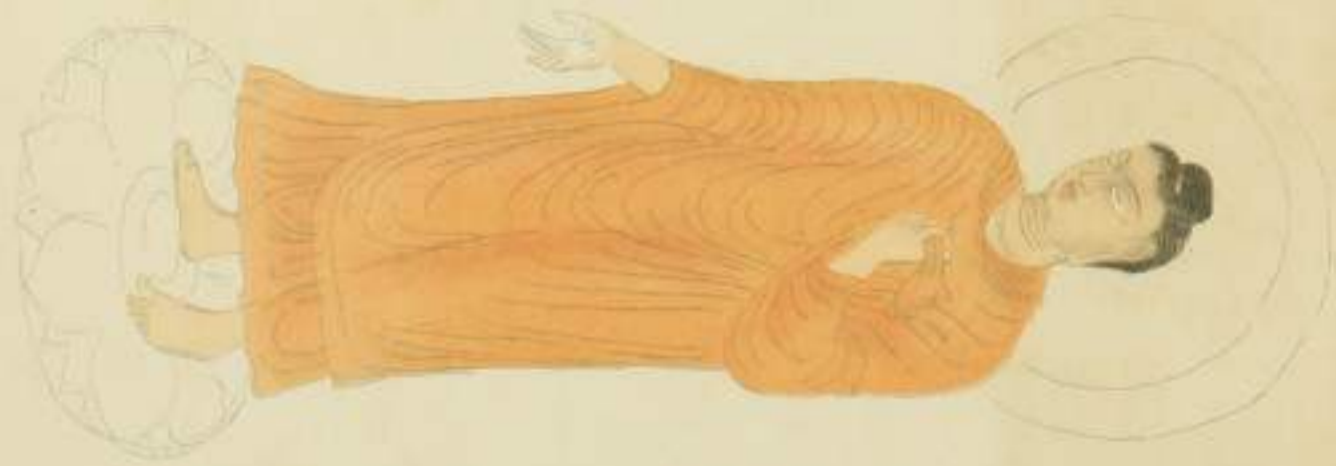
部部



部



部





阿難と鬼子母 目次

はしがき

阿難の累ひ

一頁

告 白

三頁

第一幕 センダラの吹き井戸

五頁

第二幕 第一場 ジャモンラ神の巫マトーキャ母の家

一三頁

第二場 祇園精舎の内陣

二五頁

鬼子母解脱

四三頁

エピソード

六六頁

改作 桐 一 葉

六九頁



表紙	鬼子母	荒井寛方	挿繪	滿洲の娘々神の像
見返	ざくろ	荒井寛方	挿繪	鬼子母神像
口繪	釋迦と三迦葉	荒井寛方	挿繪	鬼子母神と其侍女
本扉	織鉢	著者	挿繪	大日如来像
中扉	錫杖	荒井寛方	挿繪	二十五菩薩來迎の圖
中扉	三相	著者	オナナメント	御物縮寫
中扉	淀君と山三	前川道平氏所藏 昭和三年の繪額	外函	ざくろ
カット	劇一葉	著者	題字	表紙・本扉・中扉・外函
挿繪	センドラの星の吹き井戸	同	○	
挿繪	マトーキヤ母の祭壇	同	装釘	其他の意匠
				齋藤昌三

此一冊に集めた小品三種は、いづれも、昭和七年中に書いたものである。そのうち、「阿難の累ひ」と「鬼子母解説」とは、共に『中央公論』のために起稿したもので、前者は三月の十五日に、後者は四月九日に書き終った。「阿難」以外の二作は、同年の六月に、同時に、歌舞伎座で上演した。

「阿難」を書くに至った動機に關しては、其「告條」と題した一文中にも一通り陳べておいたが、尙ほ同年四月十六、七の兩日に『東朝』紙上に、「カシフル注射」といふ見出しで、左の一文を掲げさせた。

「新演劇進展の障害物だとして呪詛されてゐた時分の歌舞伎は、明かに老衰はしてゐたものゝ、まだ一、憎まれっ子世にはゝかる底の殘餘精力があつたのである。ところが、其亡滅を單なる時の問題とされる現在の歌舞伎は、もう全く死に瀕してゐるのだ。依然として興行者は歌舞伎系統の作を主な出し物としてゐるやうに見えるが、畢竟、それは、大衆向きとして、それには代るべき恰好な作がない爲と、俳優の藝風と、その遺書とを捨てるに忍びない爲とに外ならないのである。必ずしも歌舞伎に執著してゐるのではない。劇の新展開を望まないわけでもない。營業上有利なら、どんな革新をも敢てして見たい勇氣は（少くも）歌舞伎は、聞いて見るまでもなく、滿々としてゐるに相違ない。歌舞伎は、明治初期以來、今にも死ぬだらうといはれたことが何度もあつた

が、其態度、豫想を裏切つて、不思議に生き返つて、今日に至つたのだから、今後とても、又何とかして變質するか、生れ變るかして、血脈だけは保存し得るだらうなどと論ぜられるが、とにかく、歌舞伎が現在ほどに衰微のどん底に落ち込んだことは、前には決してなかつたといつていい。それは、正當に歌舞伎式と稱すべき現代向きの新作が絶無であるのでも解り、「忠臣蔵」だの、「菅原」だの、「勅使」だの、黙阿彌物にしても、いつもキヤリの作ばかりが繰返されてゐるのでも解り、いはゆる名優連が、硬念ながら、そろつて老病人乃至老病人になつたり、なりかけたりしてゐるのでも解り、最後に、しかしながら、もつとも重要な事として、正當にいふ歌舞伎には、是非無くてはならない専門的の、エニ味十分の若女方、五世幸四郎式の敵役、たゞ出て来たばかりで見物を可笑しがらせるチャプリン式の道外方などが絶無であるのでも解る。

現在の歌舞伎は、まことに悼ましいことだが、九死一生の境にある。明治末もしくは大正中期までは、さすがに尚ほ歌舞伎に對する愛着を脱しかねてゐた観劇家も、今の歌舞伎には參つてしまふ。俳優も藝風も演出もチグハグ、おまけに、作の内容が餘りに時代と懸け離れてゐる。例へば、古歌舞伎、竹本物、能や狂言からの借り物等は、少くも二三百年以前のイデオロギイそのまゝなのだ。明治初、中期の作とても、その以後に、社會の情勢が、大業にいへば、百年がたも飛躍したのだから、新時代の感情や理智に懸へ得るはずがない。それに、「能」ほどに型が嚴守されず、「能」ほどに技巧專一でなく、「能」ほどに樂劇的でなく、又「能」ほどに單純でなく、生中な理窟や寫實が加味されてゐて、管々しいから、退屈なばかりでなく、反感さへも起る。

以上は、自分もしばしば論じし、他の諸家によつても、既に今までに遺憾された事なのであるが、さうして歌舞伎が、一日一日と、危境に瀕してゐることも事實なのであるが、最近に於り、新時代の劇作家及び好劇家の或る部分の「衰微の歌舞伎に對する」態度の變つて来たのが目に附



て見捨つべきものでなく、むしろ顧る利用するに足るものであるといふ感想なのである。要するに、死にゆく歌舞伎から、其法式、其技巧、其手法だけは、永くリグーシーとして貰つておきたといふのである。按ふに、これは、いはゆる新劇の個性、イデオロギイ本位のプロ劇の劣技巧、藝術的劣價值、等々に其人々が絶望を感じはじめた所からの反動なのであらうが、それは至當な、健全な傾向であるとも言へる。たゞ疑問は、そのリグーシーを正しく且つ手堅く活用し得る作者がいつどこから輩出するかである。

歌舞伎は今方に死にかけてゐる。形見を貰ふなら今のうちである。死んでしまつてからでは、遺産の所在が不分明になるかも知れない。

死んでゆく老衰歌舞伎は惜しくないにもせよ、遺産の所在を明かにするために、せめてカンヅル注射でもして見たらどうだらう。

憔悴枯槁はしてゐても、まだ今なら、幾らか息が通つてゐる。昔の面影が残つてゐる。さう思つて、最近、自分は二種の劇を作つて見た。主として歌舞伎のフオーミツラとテグニ

タとを適用して見ようといふ動機からの作だ。一は「阿蘇の異ひ」と題し、他は「鬼子母解説」と題し、共に佛經に依據したもので、その意味からいふと、二三百年前のイデオロギイどころでなく、二千何百年以前のそれであるともいへるが、自分としては、能や竹本物や黙阿彌物よりは多少現代に觸れる點があるやうに感じてゐる。が、作者自身が——即ち讀者みづからが——本年七十四といふ老耆者であり、死にかけてもゐるのだから、手がふるへる、目がかすむ、注射の見當も

はづれ勝ちだ。手當としては、何の役にも立たないかも知れない。私のが駄目だったら、だれか若い方の手で、更に二三本注射して見て下さい。

右の拙作は、二種とも、「中央公論」へ載せることにした。「阿蘇」のはうは五月號に出るが、「鬼子母」のはうは、まだきまつてゐない。後者は舞踏劇で、「勸進帳」の向うを張らうといふアンビシヤスな大物だ、と自分で宣傳しておきや世話はない。

次に、「鬼子母」に關しては、七年六月號の「藝術殿」に掲げた左の一文が、其由来をも、其上演事情をも盡してゐるから、轉載しておく。

「鬼子母解脫」制作の動機

私が舊所作事の刷新を基礎に、新樂劇、すなはち、新舞踏劇の創始を提唱して、「新樂劇論」と「新曲油島」を公けにしたのは、明治三十七年なのだから、それはもう二十八年も前の事である。さうして其間に、内外とも、全く前例のない程度に舞踏が歡迎され、禮讚され、随分勢しい新作舞踏が發表された。今も尚ほ引きつゞいて發表されつゝある。けれども、少くも、わが所作事系統——歌舞伎系統——の新舞踏劇には、今以てどういふ劃期的の作も現はれてゐないのは、どういふわけだらう？ 長期の興行用として復演されるそれらは、依然として徳川期乃至明治初期の舊作づくめではないか？ 演舞場、演藝場又は劇場で短期的に上演されるものの中には、關西、關東とも、新作物が多いやうだが、それとて、半分がたは、依然として能や狂言からの借り物であつたり、たかやうに舞臺裝置か、背景か、照明かに變分かの時代味を加へたに過ぎない舞踏形式の物であつたりする。時に、研究的に上演される新作とて、これは時に聞くだけで、目撃して



はゐないが、續して外國舞踏の手法を幾分か取入れた舞踏形式の物か、歌詞メヤ、器樂本位の舞踏劇かであるらしい。千原とか、清玄とか、アサヒ、グロの舞文の殺人舞踏をアイト・カサトウにした、幾多な新舞踏などあるさうだ。さういふたゞの物は、大抵歌詞なしだと聞いた。私も、十年前には、わが舞踏劇の行き詰りに直面して、歌詞メヤ、器樂本位の止むを得ない所以を提唱したこともあつたが、今となつては、それにも望みを馳しかねる。

要するに、歌舞伎の行き詰り以上に、所作事系統の舞踏劇は行き詰つてしまつてゐる。此人ならと思ふ作曲者もなし、振附もなし、で、新舞踏創作に斷念して、自分では筆を投げたもの、舞踏の研究は著しく進んだし、新舞踏要求の機運だけは明かに動いてゐるのだから、どこからか、誰れかと新發展の途を開くであらうと望望してゐたが、ねつからさうした機運も見えて来ない。で、もう自分などが出る幕ではないと思ひながら、ほんの間の機運で、「良寛と子守」を書き、「變化體」を書き、上演もさせて見たが、作曲も、振附も、例の如く、取つたか見たかだから、後期した通りの成績の得られよう道理はなかつた。

それにも懲りず、「鬼子母解脫」を書いたのは、次ぎの如き仔細がある。
一、病後の梅毒のために、といふ老婆心切。
二、松羽目物を能、狂言の抽直しから脱化させ、而もあの簡素な、高雅な舞臺裝置だけは利用して見ようといふ意圖。
三、在來の松羽目物は能の模倣以上に出ないものであるため、いつも後ジテが鬼になるといふ紋切型、それを悉くひっくり返して、初、中、終と三段にシテの顔面を變化させ、中は怖ろしい夜叉の面、最後は端嚴殊麗な天女神といふ趣向。

四、世界的傳説「巨母神」の劇化。

五、舞師の在来性は歡喜踊躍であるのだから、少くも其終局は陽氣な、即かな、爽快な、もしくは勇壯な活動でありたい。悽慘や陰鬱や悲哀を加味するものもよいが、毎にそれを曲、編、程度に止めることを忘れてはなるまい。とにかく、純酷や醜怪を主調としてはなるまい。悽慘や哀傷をすらもだ。そこに「能」と「歌舞伎」の分れ目がある。後者系の所作には、たとひベーツスを主調とした場合にも、多少の滑稽を加味する必要がある。餘りに寫實的な狂亂や慘酷らしい殺人に終るやうな舞師は不快、いや、不調和だ。

六、「勸進帳」は名曲である。「能」からの借り物であるとはいへ、巧みに歌舞伎化されてゐ、其上、何千回となく洗練されてゐるので、曲としても、型としても、完璧に近い。が、假に、われ／＼があれに類した藍本を書いたとしたら、果してどう批判されるだらう！辨慶ひとりはい役だが、ワキの富樫にしてからが、随分のモクレ役だ。あの長丁場にイゴキは勸進帳の件と「止まれとこそ」の件だけではないか？ 義経と来ては尙更だ。出の振と花道のセリフを済ましてからは、始終うづくまり通し。「判官おん手を」で一寸また動くだけ。常陸坊や四天王も押しつゝのあたりが仕事。番卒は酌の間に聊か仕事があるが、太刀持ちの子方と来ては全く氣の毒なもの。それから、筋立からいっても、「能」では、後段は一同が關を立離れた事になってをり、二度目の富樫の出は、追っかけて来た事になつてゐるから理窟が合ふが、「勸進帳」では、富樫が一旦上手（臆病口）へ入ると、すぐ其居どこで義経主従が秘密話を始める、そこへ又富樫が——但し今度は下手の揚げ



幕から——出て、かづけ物をする事になる。相處が變つた事も、追っかけて来た事も、さつぱり、唄にも、セリフにも言はせてない。思ひ切つて非寫實。それでも、つひそそれを整へた野暮はない、さやう、舞踊劇には、そのくらゐの不合理は許すべきだ。演出と斬り思つたのが、「鬼子母解脫」制作の動機であつたと言つていい。

創作より上演まで

其版案は五月號の「中央公論」に載せた「阿難の果ひ」よりも先きであつたが、書き上げたのは四月の下旬であつた。上京したついでに、先づ梅幸子の病後を見舞ひながら訪ねて、ざつと讀んで聞かせた結果、其後、急に話が進んで、六月興行に上演させて貰ひたいといふ座方からの申し込みがあつたので、自分は、何の氣もなく、歌舞伎座附きの長唄連中なら片屋榮藏一派だと考へたから、「では、作曲は榮藏子へ、振付は壽輔師匠へ」と決へ、同時に、背景、衣裳、其他一切の圖案は、印度畫専門の畫伯、荒井寛方氏へ、又、舞臺監督の助手としては、座附きの竹柴棧三（數馬英一）子へ、と何れも私から名指しで頼ませた。で、ともかくも、曾て例のない程度に、部署定めだけは、手際よく早手廻はしに行はれたのである。中にも、寛方氏は、非常な熱心で、早くも五月初めに、わざわざ、熱海の茅舎へ來訪された。片屋、花柳、竹柴の三子にも、同月十四日に第一回の打合せをした。それから、作曲及び振付に際しての私の相談相手には小寺融吉氏を頼はし、氏の手を経て、四谷の二行院の八百谷順應氏及び其他の人々にお頼みして聲明や和讃の節廻はしを聽かせて貰つたりした。勿論、其席へは片屋一派の或人々を列席させて作曲の參考に供させた。背景、衣裳、かづら等の下繪も、寛方畫伯の熱心で、例よりも早く出来、それを實物化する準備も、棧三子の努力で、著々進み、作曲のキカセと振見せは、豫測よりはヤゝおくれたが、

それでも、通例よりは早く進んだ。
こゝまでは先づ編調であった。其曲や其振が作意にピッタリとしてゐたか、あぬかは別問題として。

ところが、顔合せ、本読み、楽屋に於ける間合せ、振見せ以後となつては、第一に、時間の問題、第二に、シテの梅幸が重忠後であるための仕舞手問題、其他種々雑多の、或程度までは止むを得ない、又は尤もな、或程度までは不合理な注文や懇請が舞出して而もそれが済し崩し式に初日以後にまで互つて、作曲の改修、振の付け換へ、臺詞及びセリフの刈込みが要求されて餘儀なくされた結果、一時間と十分以上かかる筈の此曲が僅々五十分ぐらゐで済むこととなり、随つて或部分は引き續り、聞きよくも見よくもなつたが、肝腎のシテの活動の合ひの手まで喰はれたため、作意の眼目は生ぬるくなり、群舞の件などは、精古らしい稽古は殆ど只の一日も無かつたと言つていゝ上に、何度も／＼變改されたため、頗る變妙なものになつてしまつた。立頃の松永和楓の如きは、關西から、初日の當夜やつと歸京して、樂屋でお雛子連中と打合せをするといふ忙しさであつた。かういふイキヤツで初日が出たのだから、到底、物らしくなる筈がない。で、其昔なら、何とか話を付けて、作の撤回を要求したであらうが、もと／＼名譽怒などがあつて書いた作でもなし、既に一旦上演を許諾してしまつた以上、初日間際となつて、彼れ此れ言ふのも老人がひのない事だから、一切を讓歩して何も言はずじまひ。

演出上の舞臺效果、俳優連の技藝の巧拙は、一觀された諸君の批判眼に一任して筆を擱く。



「鬼子母」の上演は、右の如く不成績に終つたが、自分としては、若し作に、振にのみ演出に、多少の新工夫を凝らさざれば、著しく見直すことの出来るもの、少くも觀

者をして退屈を感ぜさせない程度にはなつてゐる筈と信じてゐる。但し「阿雑」は舞物である。先づ、私が要望してゐるやうなチヨウヤの作曲家を得ることが困難だ。假に、或程度の作曲が可能であつたとしても、それを臺に一切を綜合藝術式に仕上げるのが大骨だ。といふのは、セリフ題はしや或仕草や振などには相當の指圖が出来ないこともないのだが、基礎となる曲だけは、當の作者の手では、どうにも斯うにもならないからである。で、此一作は——いや、他の二作とでもであらう——ま、ほんのお笑ひ草に、紙の上だけで讀んで貰ふに過ぎない代物だ、と言つておかねばならぬ。

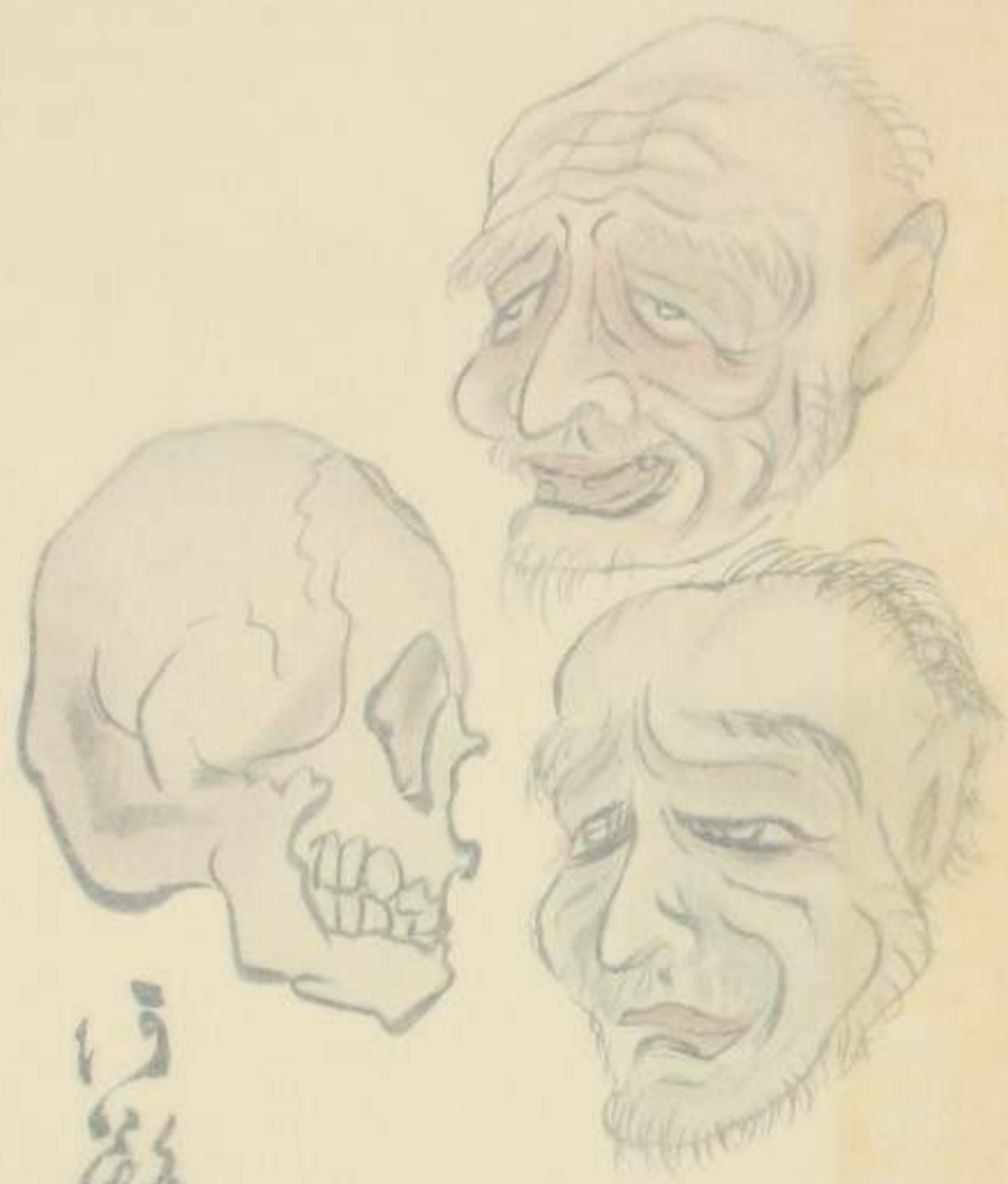
さういふヤクザな作ばかりを、物好きな齋藤昌三君の好意の斡旋で、不相應に贅澤な本に仕立てゝ出版してくれられた書物展望社の盡力に對して、こゝに一言感謝の意を表しておく。

昭和九年三月中旬

於 齋藤昌三 著 者

阿難と鬼子母





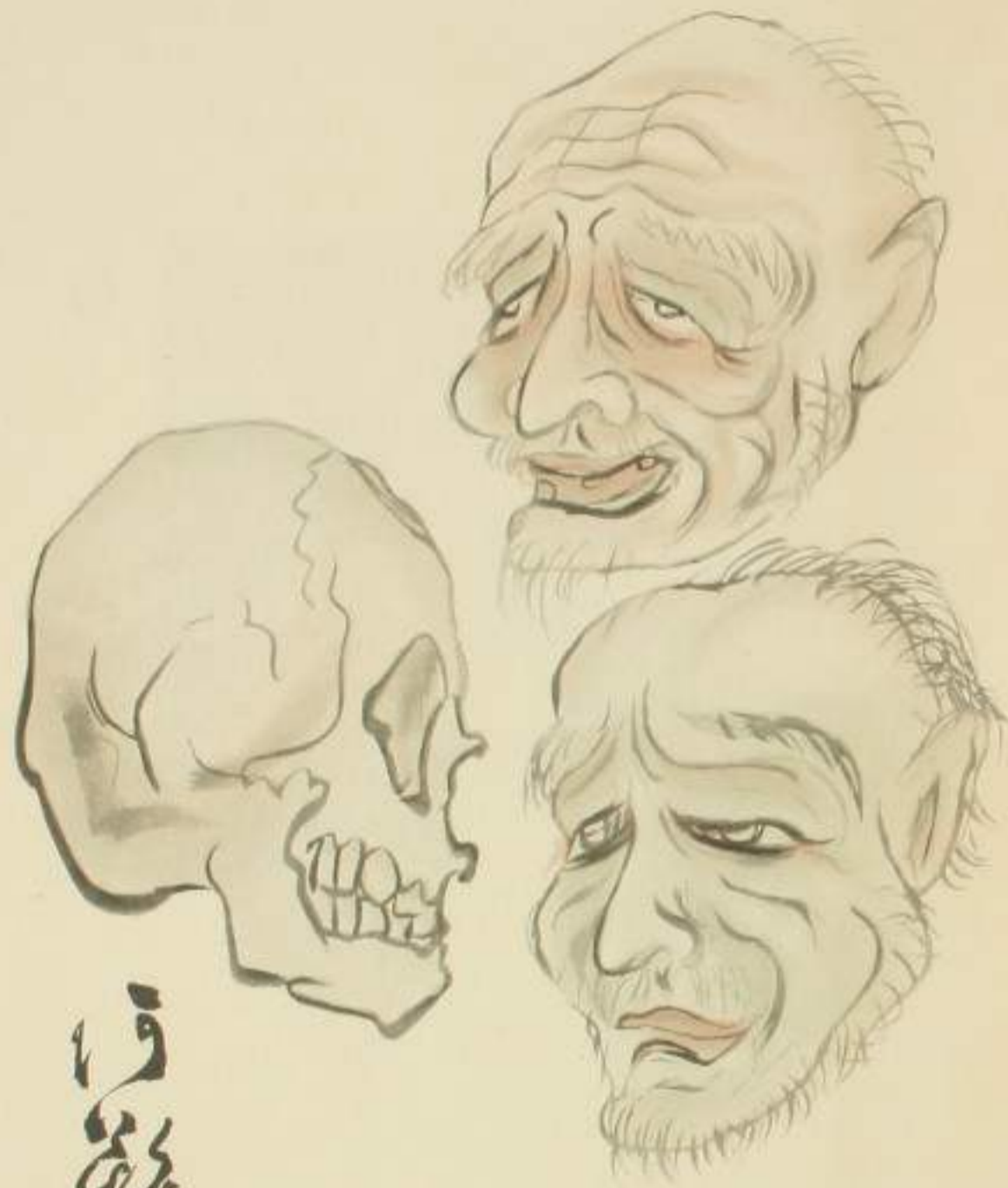
فکر و فکر

فکر

فکر

فکر





死の相

相死

相老

相病





江ノ浦の風景のスケッチ (任)





石井を流るる里のラダシキ (石井)





△古い草薙に新しい酒は盛られないといふが、それは、草薙だから、飲み込んだ奥みがぬけ切らない爲だらう。金銀製の古い鏡子が瓶子になら、どんなカクテルでも盛れない筈はない、と自分は思ふ。

△收獲の歌舞伎が異口同音に祝賀され、其に誠が單なる時の問題とのみ見做される現在に、チヨボ入りの脚本なぞを捨て出すのは、一代を百歳に似たアタタコニズムだ、と頭からヒラスされさうだから、一應、主線だけを言はせて貰ふ。

△自分は、歌舞伎の形式の尙ほ將來に利用するに足る事を信ずる。さうして、先づ最初の試みとして、其形式の一つであるチヨボの復活を主張する。

△明治、大正の寫實主義や自然主義は盛んにチヨボを排斥した。それには相當の道理があつた。が、機運は循環した。今は寧ろチヨボを新式化して復活すべき時だと思ふ。從來の作者はチヨボの本領を意圖せずに使つてゐた。彼等は只因襲に引きずられて、何の變哲もない散文的な文句を羅つて、其場々々の間を聲き、メリフに又仕草に一種のリズムを、音楽味を附加してはゐたが、其機式は陳套以外の何物でもなかつた。

△自分は思ふ、チヨボは之を善用すれば、ギリシャ劇のコーラスに似た役目をするが、それよりも數等簡約であり、自由であり、自在である點に特長があると。それは、メリフで言はれぬ事又はメリフで言はせては妙でない事を語るものであり、事情や由來や關係を略述するものであり、當該人物の心理を説明するものであり、不即不離式に劇を歸納化する手段であり、作者又は觀衆に代つて、人物や事件を批判するものでもあり、複雑な其場の光景を摘要して詩的に放散するものでもある。ところが、從來の所謂チヨボは——丸本物のそれでない、狂言作者が因襲に引

きずられて綴ったのは、——特に如上の用意があつて書いたものではない。随つて、十中八九までは、單に事件や狂草の平叙な説明たるに止まり、正當に謂ふ批判などはなく、詩眼もなければ、心理評もない。さうしてそれに伴ふ俳優の仕草も餘りに文句に即き過ぎ、其結果、とかく同じ型に墮するものが例であつた。丸本物以外のチョボが次第に排斥されるに至つた所以である。

△自分はチョボの新式化を可能であると認める。けれどもそれは、作者と作曲者と俳優との協力に俟たねばならぬこと勿論である。いづれかと云へば、主要な責任は寧ろ後の二者に在ると言つてもいい。例へば、今回の試作の如き、紙の上で讀まれては、何等の新しきも見出だされないのであらうが、若し之を自分が豫期してゐる通りに、チョボと俳優の關係を不即不離式にすることが出来たら、少くも従來のとは全く異なつた苦味を醸し得るであらうと思ふ。だが、それは主として作曲者の伎倆と俳優の工夫とに俟たねばならない。チョボの新式化に關しては、或具體案がないでもないが、今それを語る必要もなく、又、筆で記述し得られることでもない。

△此作は、劇場の廻り舞臺を同じ大きさの三場に仕切り、湯舟形のまゝ、こゝに挿入した假の下繪の如く、専らカキワリを以て、其場々々の模様を現はし、出道具は成るだけ少くする豫定である。さうして扮装は、出来る限り印度舞式にして、ネグロチックな味ひを見せるべく、美女や美男は皮膚の色を乳白に、黒奴は黒く、老翁や老婦や黒人の或者乃至羅漢などはトノコ、釋迦は黄金色、邪法つかひの巫女はやゝ青みを帯んだ肌の色といふ風に、特別な化粧をさせる積りである。

△こゝに挿入した下繪は、要するに、作者の心持を暗示するものたるに過ぎない。トガキだけでは、或ひは讀者達が理解し兼ねられようかととの、ほんの當座のめざくれなのである。

△藤岡舞臺阿蘭陀に關する事は、「藤岡舞臺」、『藤岡舞臺』、『藤岡舞臺』等に依據して書いたものではあるが、それは主として大綱に關する限りで、細目は全然空想の産物である。年時、時代、其他、すべて史實には拘泥しないで、外道の神の如き、本文では、婆羅門(Prasanna)となつてゐるのだが、わざとそれを藝術としての都合からだと諷刺された。

第一幕 センダラの里の吹き井戸

里はづれの山の麓。正面のやゝ上手寄りの奥に吹き井戸、直徑四尺ほどの石の井筒、四方へ清水が吹きこぼれて下手へと流れ、小川を形造つてゐる。處々に土手板。背景中の木々はいろ／＼の花盛り。井筒のすぐ脇にも花の咲いた一本の立ち木。(口繪「甲」参照)

あちこちで種々の小鳥の聲。
幕があく。センダラの娘甲は右の小流れで洗濯をしてをり、同乙は水瓶を全入りにすゝいでゐる。(後に井筒の水を汲む。)二人とも古代印度式の束髪、半裸體式の輕装。

甲

乙

甲

乙

甲

乙

甲

乙

あんな、今夜、あのマトーキヤさんとお祭りへ行かない？
お祭りつて、何のお祭り？
マア呆れた？ けふはジャモンラさまのお祭りつて事を知らないの？
だつて、わたしちひさい時から餘所へやられてゐて、ツイ去年歸つて来たばかりだもの。
ア、さう／＼！ さうだつてねえ。ちやアまだあのマトーキヤさんのお婆さんがジャモンラさまのお婆さんだつて事も知らないのね。
ジャモンラさまつて何さ？
ジャモンラさまつてのはね、それは——御靈驗のあらたかな神さまよ。けふがその御靈驗なの、

甲 乙

お参りをして、あのお婆さんにお祈りをして貰へば、どんな願ひでも叶ふッていふの。アウ、チャ、わたしも行くわ。あんた連れてッてね。
(上手を見て)ア、噂してたら、マトーキヤさんが来てよ。
上手からマトーキヤ女(十七歳) 頭に水瓶を載せ、少女二人とAとBを連れて出る。少女らも水瓶を載せてゐる。
(東装の様式、半探儀式の服装、前の娘と大同小異ながら、マトーキヤは富家の女らしく、耳にも胸にも胸にも珠玉の飾りを付けてゐる。)

甲

マトーキヤさん、こんにちは！ さぞ、けふは、お忙しいでせうね。もう、大概、お支度は出来て？ 手傳ひにゆきまじよか？
ありがと。お掃除だけは出来てよ。お供へ物々お護摩の支度はこれからだけれど。ねえ、お燈明が暗くころになつたら、みんなでお参りにいらつしやいね。
「いひ、少女らと共に、水瓶をすゝいでゐる。

甲

(洗濯をつげながら) あんたはほんとに仕合せねえ。お母さんはあゝいふ節いお婆さんだし、お金持ちでもあるし、親ひとり、子ひとりのお祝儀ッ子さんなんだから、わがまゝの言ひ放題、しはうだい、羨ましいわねえ。

マ

マア、さうでもないわよ。ツイ此間も、さんざん無理な事をいつたわ。どんな事を？

マ

あのいやなスーゴクさんを内のお婆さんにするッていつたの。

甲

オヤ、あなたも、母金があつたつても、あんなお供けのやうな人ぢやねえ。おんまりあんたが聞然さうよ。三十三相のどの一つも御足ぢやないんぢやないの。

甲

三十三相といふ、さういふ事な托鉢の沙門さん、年はやうと二十五かゝ、お婆さんにや情しい好い難さんよ。乞食行まゝいつた、あゝして俄日々々托鉢してゐるの、お婆さん、あんたも聞徳れしたッても駄目よ。向うさまは刺刺利さん、こちららはセンダラだらうぢやないか？

乙

でも、見るは放棄よ。せめて、顔だけでも見たいわねえ。

甲

(ふつと向うを見て) オヤ、御覽よ、ソラネ、向うからやつて来るのがあの人らしいわ。……

乙

此うち、マトーキヤは水を汲み了りて、少女らと共に歸つて行かうとする。

男

よう、マトーキヤさん、マア、もう少しこゝにゐて、あの人を見てらつしやいよ。そりやいよ男よ。

マ

まうオ、そんなに綺麗な人！ (ト少女らに) あんたゝちはね、それを持って二足先きへね。ト少女らちなづき、水瓶をいたゞいて、上手へ入る。
ユカの浮るりになる。

浮

浮へセンダラと穢まれたる里ながら、見るさへ清き吹き井戸の、清水あふるゝ山かけや、木々の花咲き鳥うたふ、今を春日のうら若き、世を捨て人の頭陀修行

阿

此文句のうちに、向うより沙彌阿難(二十五六歳) 袈衣袒肩、跣足行乞の扮装、左の手に鐵鉢、右の手にきやし、左の錫杖を持って出る。

阿

浮へゆき、なければ師のをしへ、習誦しつゝを來りける。
花道の中ほどまで來ると、初めは小聲で、だん／＼聲高に、大げな文句を誦しつゝ歩む。
專行乞食、所爲有二、一者爲自、省事修道、二者爲他、福利世人。



すぐ此後から沙彌(二十三四)、同じ袈裟、低能者といふ思ひ入れ、やはり、錫杖と鐵鉢を持って従いて出て

行者(食者)破一切憍慢

ト口眞似をする。阿難は一寸不審の思ひ入れ、けれども其まゝ歩を進めて

ト衆特又口眞似。

ト衆特又口眞似。級一切……

ト阿難(花道の七三の邊で)ふり返り、衆特を見て

「オヤ！ 衆特君ぢやないか？」

(平氣で) さうや。衆特君や。

(呆れて) アレ！ 君は東の方へ、わしには西の方へと、先期、世尊さまが、あれほどお懇ろに

(考へて) さうやつたかなア？

「オヤ、もう忘れくらまつたのかい？」

「オヤ、こゝからでもいゝから東の方へ行きたまへよ。

うん。

ト衆特は(揚げ幕の方へ)戻りかける。

「オイ、それぢや南へ行つたまふよ。」

「さよか！ ほしたら、どつちへいたらえいのや？」

「東はあつちだよ……サア、早く。」

ト上手へ指さす。衆特はサアと香込んで行きかけたが、ふと娘らに目を附けて見とれる。そのとげた様子を娘共

はをかしがつて、目引き袖引きして笑ふ。阿難はそれに氣が附かず、ステゼリッで衆特を促す。

「促されてもあらうことも、道紳くうでぞ歩み行く

衆特サアと上手へ入る。

淨 影見送りて吐息をつき

阿 あの衆特は愚かだが、生一本であるだけに、存外早く羅漢果を得るかも知れない。が、阿難に

は二つの魔障がある、人衆倍の用心をして修行を積まないと、到底、彌戾車を破り得まい、と

世尊さまがおっしゃったと噂に聞いたが、二つの魔障とは何だらう？ 氣になつてならぬ。

いっそ直接にお尋ねして見ようか知らん。二つの魔障！ 二つの果ひ！

トいひつゝ、ふと吹き井戸の方を見て

「オ、清涼さうな水だ！」と思つたら、急に口が濡れて来た。……あの清水を報謝して貰はう。

ト娘らのあるはうへ進む。マトーキヤはじめ娘達よろしくこなし。

(マトーキヤに) 濟みませんが、どうぞ其お水をいたゞかせて下さい。

(一寸はにかんで) アノ、わたしの、此水瓶の！

ハイ、どうぞそれを此鉢へ。

ト鐵鉢をさし出す。娘、甲、乙、ちつと陶焼き氣味になり

(阿難に) ねえ、あなた、わたしたちは、みんな、此里のセンダラよ。(乙を指さして) この人も。

(マトーキヤへ) こなし。あの方がよ。

あなたは判帝利さんでしょ。センダラの手から物を貰つてもいゝこと！

さういや、此井戸の水だつてさうだわ。わたしたちがしょっちゅう使つてるんだから、あなた

たちが飲ると、汚れてよ。

淨

阿

阿

阿

マ

阿

甲

乙

甲

乙

乙 まうよ、ほんとうに。

甲、乙 へ、へ、へ、へ、

阿 淨へ口から出任せ、からかへど、こなたは眞面目。

何のそんな事がありませう。尊師如來は、凡そ世に有るほどの有情の者は言ふにも及ばず、非情の草木とて、人間と同様に、いたわり、愛すべきものだとおっしゃつて、常々「慈眼衆生」と説かせるのです。又、かりにも眞の道に入らうと志す者は、種族の差別だの、階級の上下だのを念頭に置いてはならない。一切衆生は皆平等。もし假に上下があるとすれば、それは心がけと行ひの故である。たとひどんな上流に生れ、身に綺羅を飾り、多勢の人にかしづかれておもしろとも、根性がいやしく、行ひが非道であれば、それは下賤人である。それに反して身分は如何に低く又如何に貴乏であらうとも、其心がけが正しく、行ひが道に叶へば、諸人が愛しもし、敬ひもするから、取りも直さず貴人であるとおほせられるのです。或ひは又、一切の男子は皆わが慈父、一切の女人は皆わが慈母ともお説きになります。ですから、モンテッラであらうと、異國の人であらうと、別け隔てをする道理はありません。あなたもちの浪んだのを分けて貰ふはあろかな事、あなたもちの洗濯の、流れの末の水をでも、わたしは掬っていたります。

淨へと言ふ辯舌に、面地に、見ほれ、聞きほれ、口々に

阿 淨へ言ふ辯舌に、面地に、見ほれ、聞きほれ、口々に

淨へ言ふ辯舌に、面地に、見ほれ、聞きほれ、口々に



マト サア、あなた、お水を！

淨へ水瓶ささげ、さし寄れば

阿 ヤ、これは〜

淨へ赤い受ける鉢、相手の目元、口元に、見とれて狂ふ、注ぐ手元

水瓶の水を鉢鉢へ注ぐとて、文句の通り、阿難の顔に見とれてあたまめ、ツイ水口がそれて、阿難の僧衣や足先きを濡らす。

マト アラ、すみません！ 失禮してよ。

淨へあわて、拭ふ僧衣の裾、すはだの足の爪先きに、いとゞ心のこきめけり

阿 よろしく文句の通りある。甲、乙は立離れて見てみて、よろしく思ひ入れ、こなし。

淨へア、もうよろしい、もうよろしい。どうぞもうおかまひ下さるな。

淨へ「聞伽おしいたゞき、一同へ會釋、錫杖突き鳴らし、西の方へと行く姿

文句の通り、水を鉢鉢へ受けたが、マトキヤの以上の行動の爲に、聊か照れた形、そこで水を飲まうともせず、そのまゝマトキヤはじめ、甲、乙にも會釋して、鉢をささげたまゝ、しづかに下手へ入る。

淨へ見とれ、見送るマトキヤ女

マトキヤは水瓶をよさらさけるやうにして持ったまゝ、其後ろ形を見送つてゐる。甲乙は目引き袖引きして、近寄り、代る人「マトキヤさん」と呼ぶ。けれども耳に入らぬらしいので、サッと寄つて、二人聲を揃へて

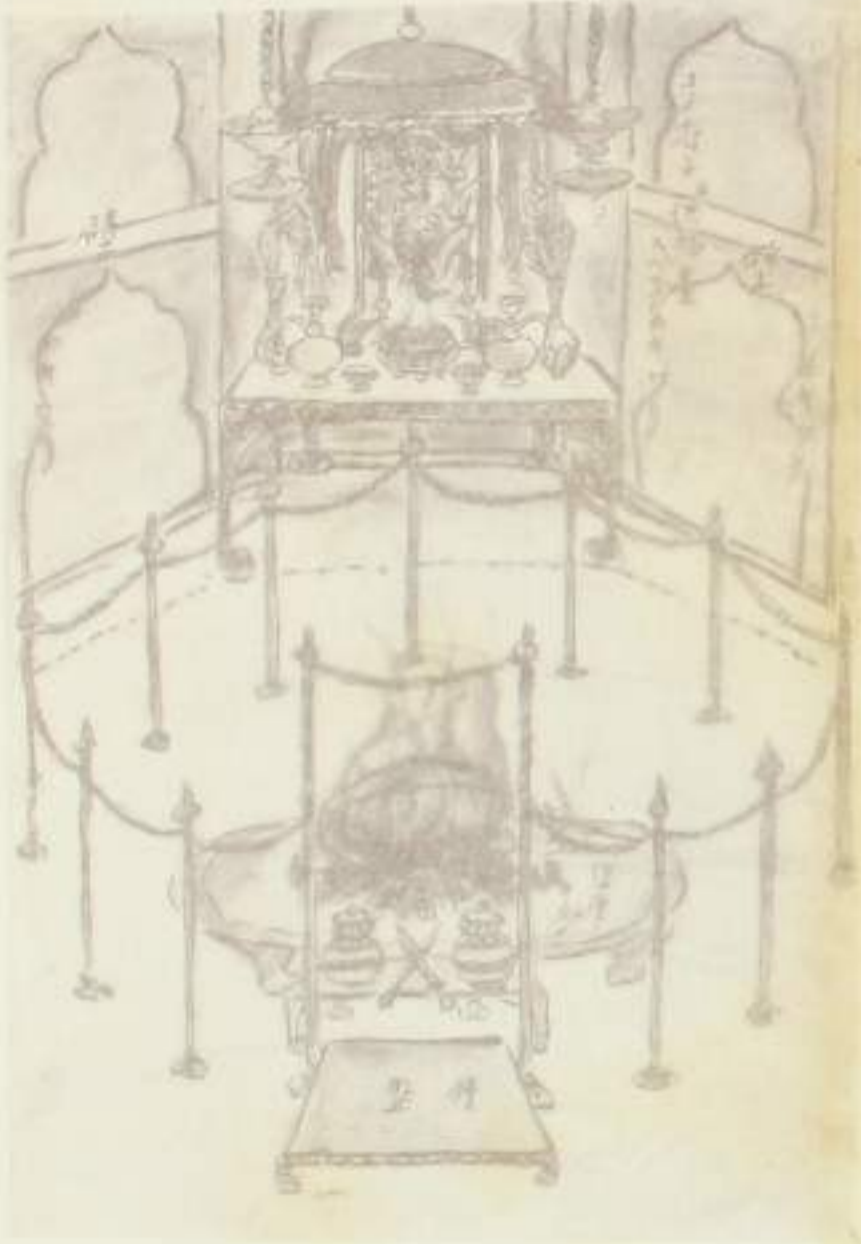
甲、乙 マトリーキヤさん!!

上甲がマトリーキヤの背中を一つ持つ。

浮うく背せ叩たたかれて取落す、瓶びんの碎くだくる響ひびきさへ、耳みみには遠とほく、氣きも遠とほく、面影おもかげ残のこる其人そのひとを、
身みにしみくくと懸かひ風かぜや、只ただ茫然ぼうぜんと現あるなき

文句ぶんこうの通り、水瓶すいびんを取落すと、それが微塵みじんに碎ける。マトリーキヤはそれにも心附かぬらしく、茫然ぼうぜんと下手したをのみ見
送おくつてゐる。甲、乙よろしく思おもひ入れ。
種々しゅしゅの小鳥こどりのかしましく啼なぐ聲こゑ。

幕



三三三



第一場 ジャモンラ神の巫マトーキャ母の家



第二幕

正面の奥にジャモンラ神の厨子、其すぐ前に祭壇、釣燈明、香燭、生花、其他の供へ物よろしく（以上カキツリ）、其前（舞合中央）は床の心、そこに直径六尺程の、護摩を焚く洲濱形の青銅爐、牌の高さは三寸程——爐には同じ太さの薪が勢しく焚べてあり、火が熾んに燃えてゐる。其爐を圓形に圍繞して、程よく間を隔て、排列された長四尺の真鍮の九柱十一本、別に正面に特に、高さ八尺の、やや太い真鍮の柱二本、其上部に、圓の如く紅、黄二色の組繩を引き渡し、餘りを左右共に巻き附けて、四尺柱の處まで巻きあらし、そこから左右一帯に引き渡し、其繩の處處に、響へば、往還繩に挟んだ四寸のキウに、生殺しの蛇を首を下にして何十尾となく吊し下げである。で、正面の九柱二本は何となく鳥居の形になつて見える。其鳥居形の内部、爐に接近して、横二尺餘、横五尺、高さ三尺の卓子、其中央には古風な印度劍が二口、X形に交叉して置いてあり、其左右には大形の酒瓶、これは此座の行ふ儀式の常例で、ありとある毒蟲を——例へば、テトリ、マムシ、ムカデなどを——五十疋づつ果實酒に生き浸しにして密封した瓶なのである。（口繪（乙）参照）

それから、すぐ其卓子に接して、方四尺餘、高さ五寸の牌の附いた禮盤、上手と下手とに出入り口。上手は横、下手は引き戸。

カツと下手（花道の附け障に近く）門口。カブヤの定式の世話本戸の如く、獨立した出道具の門構へ、横子張りの観音屏、幕あきには開け放してある。

里五六 さよなら、お休みなさいまし。

皆々 皆々會釋して、次ぎの文句一ばいに下手へ入る。

淨 會釋をわめき、立歸る。

母 (黒奴に) お前たちも、マア暫くお休み、用がありや歸を鳴らすからぬ。

ト黒奴一、二、無言で一寸頭を下げて、下手の引き戸口へ入る。

淨 後夜の護摩火の仕度をして、座を立ちあがる母の傍、娘は首尾を待ちあへず

娘 母さま、わたし、ほんたうに、後生一生のお願ひがあつてよ。是非聽いて下さる?

母 マ、とんきよな、だしぬけに! びっくりするぢやありませんか?... 改まつて願ひといふの

は?

淨 サア、そのお願ひは...

淨 氣まゝ育ちもそれぞとは、さすがに一寸言ひこゝくれ

娘 母さま、あなた、親愛さまつて方知つてよ?

(又坐りながら) 知つてますとも、あの人、今は、ツイ此先きの紙國精舎で處でお説教をしてゐま

す。このごろは、信者がますます、殖えて、毎日の聽聞者が何千何百人で敷だとか聞きましたよ。

娘 ぢやア、怖い方!

偉い人にマアちがひないね、言ふことは氣にくだないけれど。サビエ國の王さまの世繼ぎの

王子さんと生れ、萬人が萬人まで羨ましがれる権威も名譽も願ひも、何もかも身に備はり、笑し

いさぬや可愛盛りの男の子であつたのにさ、まだ三十にもならない時分に、そんなものを

まるで穢い物か何かのやりに替りけりな打捨ちまつて、山へ入つて、五年も六年も修行を

したり靈神を組んだりして、悔りを聞いて、今までのとは違つた新しいお宗旨を説きはじめた

のだからね。とにかく凡人にや出来ない事さ、初めは、マカダ國やケウサラ國の人だけに難が

れてゐたんだが、今ぢや此邊の者までが歸依するやうになり、定つた弟子達だけでも千人以上

あるつて事だよ。

其お弟子の中に、阿難さんて方があつて?

あります。其人は學問もよく出来て、利口でもあるから、一等親愛さんの氣に入つてるとかい

ふよ。

ねえ、母さま、ねえ...あの...ねえ...

ト母の膝に手を載せて仰すぶる。

え、何を? どうするのさ?

ね、後生一生のお願ひですからね、其方を、あのお姉さんにして頂戴。

(呆れて) どうかしてるのね、お前は? 奥拍子もないことをいふ子だよ、此子は! 今もいふ

通り、親愛さんの一門は家とは第一に宗旨がちがひ、おまけに、種族もちがひます。あの阿難

といふ人も王族生れ、わたしたちセンダラとは身分がちがふよ。よしんば在家業だつて縁組の出

來ないのが定りだのに、あの人たちは世を捨てた抄門業なんだから、何よりも先きに、一器機を

結つといつて、女を近附けないのを戒律としてゐるんです。だから、近もお前...

ト言ひかけるのかよせて

でも、あの人、けふ秋き井戸で逢つた時、人間には身分のちがひなんかあるもんぢやない。決

娘 母 娘 母 娘

してセンダラさんだつて別け隔てはしません。あんなの汲んだ其水を飲んで下さいとまで言つたわよ。さうして……

母 え、けふ遊つた？ あゝ！「チャア……綺麗な坊さんだといふ評判……それで一目惚れをしてそんな馬鹿なことを言ひ出したんだね。

娘 馬鹿なことぢやないわよ。わたし、どうあつても、あの人がお嬢さんに持ちたい。けふの様子では、あの人も萬ざらいやでもないらしいのよ。だから、ヨウ、母さま、ヨウ、後生だから、とにかく愛へ呼んで、あの人に談判して見て下さいね。ヨウ！ヨウてば！

母 ト袖をひっぱつて、立ちかける母をとどめる。
馬鹿も休み〜お言ひ。わたしは忙しい。お護摩の支度をしなげりやならない。えい、お放し！

母 ト手荒く袖を振拂つて、しやうがない子だよ、ほんとに！
ト下手へ行きかける。

淨 へ叱られてくわつとなり

娘 聞いてくれなげりや、いゝわよ、わたし死んぢまふから。

淨 へ前後も思慮も泣き伏す娘

ト娘アツと壁を立て、駄マツ子のやうに、泣き倒れる。
母 (見返りもせず) また始まつたよ。死ぬなら勝手にお死に。このわがまゝ者が！

トわざと手強く言つて、下手の引き戸を近寄つたが、さすがに氣になるとして、見返る途端に、娘は體堂の上の剣を取つてすぐに自害しようとする。はやくくり開けて、駆け戻つて来て、
母 何ぞ佛堂が其儀をするんぞ、すよ
ト何となく佛堂をいひます。ママ、此手を改めし……



淨 へ只一向きに泣き狂ふ、子ゆゑに脆き母心

母 (マツとの事で剣をもぎ取つて) しやうがないねえ！ (とよろしく思ひ入れ)……それほどに思ひ込んだのなら、とにかく一應先方の氣持ちだけは聽いて見てあげるけれどね、先聽いつたやうに、出家の身だから妻帯は出来ないと言や仕方がないよ。諦めるんですよ。

娘 いやッ！……母さまが一心にジャマシラ様にお祈りをして下さりママ、あの位の人々の心は、どうにでもなる筈ぢやないの！ わたしあの人でなきやお嬢さんにするのはいやッ！ でなきやわたし、マツばり死ぬわよ！

母 ト又も壁つてゐる方の剣を取らうとする。マツとそれを遮つて

ほんとはママ(トいつたが、マツ暫くして)「ぢや、とにかく、戒るものか成らぬものか、母さんの力で出来る限り、お祈りをして、呼び寄せてあげませう。だから、もう機嫌をお直し。そんな涙で汚れた顔をしてゐちゃ、折角来させたって、愛想を盡かされッちまふよ。部屋へ住つて、お化粧をしなければしておいで。サア〜、早く〜！

淨 へなだめて奥へやり戸口、見返り鳴らす鐙の音に、應と答へて、出て来るタロンボ、

さゝやけばうなづきて、護摩木を運び、灰ふりまき、やらじ、逃さじ、まじなひの用意洩れなく整へば

ソレ！

ト目ませ。黒奴は左右から阿難の手をおさへて、剣をさしつける。

アレイ！

ト驚いて、駆け寄らうとするを、遮りながら

廻かなければ、共剣で刺し殺すか、この（ト護摩壇へ思ひ入れ）火の中で焚き殺すか、二つに一つ！

サ、覺悟をして返辭をおし！

（きつとなつて）たとひ此からだを寸々に斬り裂かれようと、黒こげに焼かれようと、世尊をお敬へば破らない。決して、決して破らない！

えい、面倒な！ 早く奥へかつぎ込んでおしまひ！

淨 へ言葉の下にクロンゴども、はや引き立てんと立掛かる、うしろに母親、前には娘、のがれん術もあら悲しや、一期の大難、絶體絶命、南無や大慈悲世尊如來、救はせたまへ、と逃げ廻はり、争ふはずみにくつがへす、須上の大瓶、酒は瀧つ瀧、焚きすての、護摩火しめつて、ほのぐらく、心はいと煩悩の、關はあやなし、はてしなし

ト文句の通り、五人相争ふ。其うちに阿難は體盤の上へ倒れる。ト其はずみで其奥にある卓子がゆれて、傾き、其上の酒瓶が二つとも護摩壇の中へ落ち、さうして砕けたらしく、けたまひしい物音。同時に果實酒が燻の中へ流れ込んだといふ心、燃えてゐた護摩火がしめり、舞臺が薄昏くなる。それにかまはず、マトーヤ母は黒奴と共に阿難を引ッ立てようとする。阿難は俯は争ひながら

阿

南無世尊、お助け下さい！……お助け下さい！……お助け下さい！……世尊、世尊！

此叫び聲の切れぬうちに舞臺が眞暗になる。舞臺が燃りはじめる。「お助け下さい！……」と絶叫す聲が次第に遠



舞臺の内部の景観

淨じやうへ小夜せやふけて、鐘かねかうく、と澄あみわたる、祇園ぎゐん精舎しやうしやの奥深く、大聖だいじやう世尊せそん釋迦しやくぢや牟尼むに如來にょらい

じやくまくとして坐ましたまふ

はじめは暗く、だんんに舞臺を明るくする。

舞臺面は、上、下とも奥深く連立してゐる大圓柱、正面にも同じく幾本かの大圓柱、そこには古びた金櫛の俵が掛つてゐる。(以上オカリリ)。上下とも、一等手前の大圓柱の裏に出入り口。

中央に、五尺四方程の坐り椅子(高き常足)、蓮華を伏せた形の天蓋が椅子の背後に取附けてあり、椅子の上には、同じく蓮華形の坐具。尙ほ椅子の上下に同じ形の油燈が二基づつ。(口繪(内)参照)

椅子の上に、結繩むすなは坐して、雙手を胸下に結んで瞑目してゐるのは釋迦牟尼である。齡は五十以上、其前の少しく上手寄りに、同じく結繩坐して、目をつぶり、手を拱こいてゐるのが羅漢目連。齡は五十六。同じく下手寄り、前の場の樂特、腰の左右に病相の假面と老相のそれとを結むすへ附けたまふ、いざたなく臥ふそべり、高々と膝ひざをかいてゐる。

淨じやうへおん宿直しゆくぢくは目連羅漢むすなは、沙彌さみ粥食じやくじきの樂特は、晝の疲れにいざたなく、眠りこけての高たかいびき、それならなくに、かそけくも、はるかに人の呼ばふ聲



くなり、微かになる。上座い處で梵鐘ぼんしゆの音、其遠い鐘の音が五聲、六點、七點と段々聞近きこに聞せてくる、さうしてそれが打切られる途端に、ニカの淨あり。舞臺は尙ほ眞理なまふ。

第二場 祇園精舎の内陣

まだ薄暮いうちに、梨特の扉の聲を聞かせ、それへかよせて、前の場の阿難の「お助け下さい〜」を何度も繰返して、遠く袂かに聞かせる。

淨へ世尊耳を傾けたまひ

ト釋迦、目を見ひらき、不審の思ひ入れ。

目釋 あしを呼ぶ阿難の聲！ あれは先刻歸つて来た管ちやに。……(ト目連に)目連々々！

淨へは。どばかりに目を見ひらき、座を改めて、禮拜す

目釋 阿難はどこにをる？ こゝへ呼んで下さい。

目釋 はッ。(ト梨特を見返り、立つて其そばへゆき、ゆりおこして)世尊さまのおいひつけちや、いそいで阿難どんを呼んで来なさい。皆の衆と一しよに、あららで殿んであるであらう。

ト梨特ヤツと目を覺まし、うなづき、目をこすりながら、下手の出入り口へ入る。

目連！

はッ！

トそのまゝ下手に住ふ。

阿難は、多分、こゝにはあまい。いつかも話した通り、あれは年の若いに似ず、利根でもあり多聞でもあるが、又求道の信念とても、蓋つて堅固であるのちやが、二つの魔障のため、今以

て要諦を説し得ない。情りだけは得てゐるが、習性で脱けられない。かく有相に著迷し、魔障に墮するによつて、今阿難は疑念に悩んでゐる。氣の毒なもつちや。

この魔障があるよかたは、それなら、當人が、いかゞ教してか、脱れ開きせしならしく



此途端、梨特が戻つて来る。

梨 雪院までもさがしましたがなア、阿難君は、どこにも居やありません。

目釋 はて、不思議な事があるもの！ たしかに歸合してゐたのに。……梨特、君は、けふ、あの仁

と一しよに出た管ちやが、一體、どこで別れたのちや！

梨 ナア、なア！(ト考へて) 何でも綺麗な女の人が多勢ゐて、水汲んでゐたと思ふけれどなア、

夢ちやツたかも知れん。

若い女人が水を汲んでゐたところ！ もしやあのヤングラの里の……

トいひかけて、釋迦の顔を見上げる。ト

では、ヤツぱり外道の邪法の爲に……

ト思ひ入れ。

淨へ印を結ばせ、おん目を閉ぢ、唱へたまふ妙陀羅尼、悉梯密、阿朱密、阿尼誦、戒池

清凉淨無垢、若我眞實、浴此流、當令持者速還反、説かせたまへば目連も、愚か心

の梨特も、合掌祈念を凝らしける。

ト文句の通り。但し此呪文其他すべてニカで語る事。

淨へ程もあらせず、あらあられたか、神呪の功德あらはれて、まぬかれ歸る阿難沙彌

ト下手(暮かげ)より阿難よろめき、駆け出て、ぱつたり倒れ、ヤツと起き上ると同時に、釋迦を仰ぎ見て、

阿

走り進み、其足下に平伏して禮拜し、ト聲を揚げて泣きながら
どうぞお赦し下さいまし、お赦し下さいまし！ もう既に三年間も有りがたいお教へをいたじ
き、一心不乱に修行してはをりますもの、未親未熟のわたくし、外道の邪法をすら破折す
ることが出来ませんで、すんでの事に御明脚に修らうといたしました。きつとこへ、女が違つ
かけてまゐります。意氣地なしのわたくしには、どうすることも出来ません。お助け下さいま
し、お助け下さいまし！

淨

釋

阿

淨

釋

阿

淨へ漸愧の涙に暮れるたる、世尊、目蓮を見返りたまひ
身、神ともに疲れ果てゝをる。介抱しておやり。
淨へおはせ畏み目蓮は、阿難を伴ひ入りにつける
ト目蓮、疲勞してゐる阿難を扶けつゝ上手の出入り口へ入る。
此間、阿難は又居眠つてゐる。
阿難はまた目蓮の舊態に復する。
ト返辭はしたが、尙ほ坐つたまふで、欠びをしてゐる。で、釋迦は（次ぎの淨るりの間に）更に二三度ステゼリフ
で促す。阿難は又我れに返つた思ひ入れ、目をこすりくゞ立上り、のろくゞと下手（幕かけ）の方へ行かうとす
る。釋迦はまた目蓮の舊態に復する。



淨

釋

阿

淨

釋

阿

淨

釋

阿

ばいばいばい物や〜！
騒がしい！ どうしたのぢや！
あゝ、あそこへ、ばいばい物が出て来たがな！
又ねとぼけたのであらう。何をたわいのない事を！
トふと突ッ立つてゐるマトーキヤ女を見附ける。娘も今の出合ひがしらで、息込んだ氣をくぢかれ、覺えず立ちど
まり、肩で息をしてゐたが、此時心附き、前へ進んで
（戻れたやうな聲で） 誰か精舎でのはこちらさんですか？
（早くもそれと覺つて） さうです。……が、あんたは、今時分、どうして、こゝへ入つて来たので
す？
（その間ひには答へず、尙ほ肩で息をして喘ぎながら） 阿難さんに會はせて下さい、こちらへお歸りにな
つたに相違ないんですから。
それなら、夜が明けてからおいで下さい。今はいけません。
（興奮して） いゝえ〜！ 是非あはせて下さい。
今夜はお歸りなさい。まア〜！
ト押し戻さうとする。
（泣き聲になつて） いやです〜！ あはせて下さい。あはせて下さい！
ト雙方ステゼリフにて争ふ。此時、釋迦しづかに目をひらき

舞

ト二三度呼ばれてから、ヤツと目をあき、また欠け伸ばをする。
オ、眠いのは尤もぢや。もうぢきに夜が明ける。明けたら代らせる。もう少しの間ぢや。辛
抱せい。それはさうと、其腰の假面は何ぢや。どうしたのぢや。
こりヤアノ何でおます。何道もノをへてくりやはりまして、アノ、ソレ、生、病、老、
死いふことをわしがよう忘れるよつてに、目連さんが目で見て覚え込めいうて、こないな風に
違つてくりやはりました。これが(ト病相の假面を取つて舞臺の方へ向け)病人……イヤ、さうぢやな
い、こりや老人……ぢやないわ、ヤツぱり、これが病人で……こつちやのはうが(ト老相の假面を
見せ)老人でおます。かうやつて常仕見てまツと、忘れることおまへん。
それはよい工夫ぢや。が、まだ一つ足らんやうぢやなう。
ア、あれか。あれも持つとりますがなア、あんまり怖らしいよつてに、切れに包んでしま
てあります。

舞 舞 舞

淨 へ言葉のうちに御思案あり
ナ、舞特、その面を暫くわしに貸してくれ。それから、ソノ、しまうてあるのも借りた
持つて来てくれ。
は。

ト假面二箇を舞臺に設けておいて、次ぎの文句のうちに下手の幕かけの出入り口へ入る。

舞 へ心得、立つて入る舞特、ひさちがへて目連羅漢、あとに從ふマトイヤ、女、濡れ肌
がらすの黒髪は、影のみ残り果色ごろも、以前にかはる新尼の、姿さびしく、もはら
しく、世尊のみまへにかしこまる。

舞

ト文句の通り、そりたての初まあた、果色の僧衣を着て、金となしすがに舞臺の面へ来て、舞をする。
オ、よく似あつた。舞臺……、さて、阿難に會はず前に、一つ大切な事を聞いておかねば
ならん……夫婦となる以上、死ぬるまでも離らん心であらうが、諸行無常というて、人間はも
とより、此世の中にある限りの物、何一つとして、一日も、一刹那も、同じ相ではをらん。け
ふ咲いてみる花は明日散る、今はすこやかな者がツイ難病に罹つたり、かたはになつたり、死
んでしまふたり、今は若々と麗はしい男女が、いつの間にか年を取り、醜うもなる……おまひ
は病氣をした事があるか。
おぼえてからは、ありません。
もとは若かつた人が年寄りになつたのを見た事があるか。
年寄りは知つておますが、さういふのは知りません。
おまひも、阿難も、今は若いのが、やがて二人とも年寄りになる。わづらひもする。それから死
にもする。此、老、病、死といふ事をよく合點せいで、比丘尼にはなれん。随つて、阿難
の妻となる資格はない。で、先づ、それを教へませう。
どうぞ教へて下さいまし。

舞 舞 舞

此、舞特、やはり、目をこすり、布切れに丸く包んだ大ぶきな物を持って戻つて来て、舞臺の前へ行
き、無作法に、立つたまゝでそれをさし出す。
御苦勞ノ！こゝへ買つておかう。(ト受け取つて、座右に置き)舞特、まだ用があるぞ。そこに
控へてをれ……眠つてもよいぞ。が、まだいらノ言ひ附ける事があるぞ。其時には、何事も
わしのいふ通りにせいよ。よいか。
ト舞特、下手の、但し以前の居場所よりは少し奥の方へ退つて坐る。ト舞臺は右の幕を舞特の方へ向けて、ちよつ

み、耳ふさがり、聲しわがれて息切れし、三穴よりは涎、鼻汁、やに、涙、皮膚は澁紙、齒は亂代、折れかきみ、ひきつる手足、アイタ、痛む身節を撫で、足を、杖を力に、ヤットコサ、運ぶ行く手の老いの坂、心も弱り、氣も弱り、登りもあへぬ生き屍。

ト文句の通り、よろしく振ありて、祭特またベタリと倒れ、苦しげに嘔いでゐる。尼は前よりも一層最痛な表情をしてちつと見詰めてゐる。

おまひも、阿難も、わしも、今にあのやうになつてしまふ。さうして其果が……ト座右の布包を開き、其中の個體——假面でない、本物——を取出して尼の方へさし向ける。

(だしぬけであつたため、おまはず、おびえて) アッ！
ト大きく叫び、身をすくめ、顔の色を變へる。

彼女、人生の無常を端的に、具體的に見せ附けられたので、其生れ附きが至つて單純で、且つ何事の経験もなく、うぶであるだけに、譬へば、眞白な紙やハンケチがすぐどんな色にでも染まつてしまふやうに、先刻からもう既に餘程深く感銘し、次第に物淋しい心持になりつゝあつたところへ、だしぬけに此最後の一撃を受けたので、はつとして、暫くは石の像のやうに、四肢も、五體も、表情も硬張らせてしまつて、動きもせねば、物も言はない。

(個體を掌上に載せてみて) かうなつてしまへば、もう男女の別はない。親も、同胞も、夫婦もない。木や石も同様、意識がない。美しい、醜い、貧しい、富む、さうして此死ばかりは、老少不定といつて、いつ、それがめい、の身の上に来るやら知れず、又、どんな貴人も、天人も、佛も、菩薩も、此死といふ苦しみを、又、かのソイ今見せた病の苦しみを老いの苦しみをさなれる事は無い。はかない者は人間ぢや、それさへあるに、人の心は羨ましいものぢや！

其をしへの片端ぢや。どうぢや、ちつとは解つたか？
尼は黙つてちつと考へ込んで、俯向いてゐる。ト釋迦は上手に向ひ
目連！ 阿難をこゝへ。
トもう先刻から上手の物かげに差控へて、以上の模様を見聞してゐたらしく、目連は阿難を連れて出て来て、釋迦の前に拜跪する。
マトーキヤ、阿難が来たぞ。
けれども尼は、ちつと俯向いたまふ、考へ込んで、顔を擧げようとしめない。阿難も同じく顔を垂れてゐるが、これは、考へ込んでゐるといふよりも、寧ろ慚愧してゐるらしい。
ト釋迦は、此時までも、老相の假面をかぶつたまふで、倒れてゐる祭特の方に向ひ
祭特キヤ！ 目を覚ませ。もう夜が明けける。其假面を脱いで、こゝへ持つて来い。
トこれにて祭特、ける／＼と起き上り、假面をぬぎ、今度は目をあいて、常の通りの表情で、釋迦の前へ進み、假面を脱いで歩いて進み、座に著く。ト釋迦、懐懐をさしおき、病、老の二つを左右の手に挿けて、マトーキヤに向ひ
マトーキヤ、これを見い……
ト尼はじめて顔を擧げる。
わしとても、いつ此(ト病相の假面をわが顔に近づけて挿け)すがたとなるか知れず、又(ト老相の假面を病相のと取りかへて挿けて見せ)此相となるか知れない。

釋 釋 釋 釋

トもう先刻から上手の物かげに差控へて、以上の模様を見聞してゐたらしく、目連は阿難を連れて出て来て、釋迦の前に拜跪する。
マトーキヤ、阿難が来たぞ。
けれども尼は、ちつと俯向いたまふ、考へ込んで、顔を擧げようとしめない。阿難も同じく顔を垂れてゐるが、これは、考へ込んでゐるといふよりも、寧ろ慚愧してゐるらしい。
ト釋迦は、此時までも、老相の假面をかぶつたまふで、倒れてゐる祭特の方に向ひ
祭特キヤ！ 目を覚ませ。もう夜が明けける。其假面を脱いで、こゝへ持つて来い。
トこれにて祭特、ける／＼と起き上り、假面をぬぎ、今度は目をあいて、常の通りの表情で、釋迦の前へ進み、假面を脱いで歩いて進み、座に著く。ト釋迦、懐懐をさしおき、病、老の二つを左右の手に挿けて、マトーキヤに向ひ
マトーキヤ、これを見い……
ト尼はじめて顔を擧げる。
わしとても、いつ此(ト病相の假面をわが顔に近づけて挿け)すがたとなるか知れず、又(ト老相の假面を病相のと取りかへて挿けて見せ)此相となるか知れない。



釋

トいひつゝ目蓮を見返ると、目蓮心得て膝を垂ぬる。ト釋迦は二つの假面を流し、ちよつと氣味あひ。目蓮心得て返り、老相の方を阿難に渡す。此うち、釋迦は又假面を取上げて、改めてマトーキヤに見せながらつまり、人間と生れた以上、たれ一人として、此三つの苦しみをまぬかれる事は出来ん。彼等とてもあの通りぢや。マトーキヤ、あれを見い。

淨

ト一回顔を見合せる。尼は阿難と顔合せながら、彼れが手に捧げてゐる老相の假面の方を見詰め、深く感傷した思ひ入れ。

釋

此三つの苦しみのみじめさにすら心附かん處かな、あさましい人間を救はうためのわしのをしへ。阿難はもう既に三年このかた、わしの共をしへを奉じて、一心不乱に修行をつとけてゐる最中ぢや。さういふ修行中の沙門に取つては、女色は強烈な酒のやうなもの。色に酔うたら、いかな堅固な道心も擾亂して、不善業に墮れ、己れを害し、他を害し、國法、教法の大罪人となりゆくばかりぢや。なう、マトーキヤ、さうは思はんか？

淨

ト文句の通り、尼はハッとして初めて眞に悟つたといふ思ひ入れ、釋迦のすぐ前へ進んで頂禮し、暫くは只嗚咽してゐる。阿難も又うのむき、今度はちつと考へに沈んでゐる。此時、製特も、尼と治と同時、何か俄かに非常に朗かな物を見たといふ思ひ入れ、前とはちがつた表情で、釋迦の方を見つてゐる。

尼

わしにもけふは本當に解りました。あのおまをしへば、もう決して忘れません。ふたりとも、たしかに、不退轉の羅漢果を得たぞよ。トいふ途端に、すぐ耳元で、明け六つの梵鐘。一回暫くは無言。其うちに鐘を打ち切る。もう夜が明けた。みんな、疲れたであらう。返つて休むがよい。ト尼は、やつと涙を拭ひをさめて、改めて禮拜して

釋

世尊さまへ改めてお願ひがございます。此有りがたいお教へを、心得ちがひをしてをります母にも、説き聞かせて、お弟子にならせたりございます。けども私ひとりの方では、覺束ないと存じますから、どなたか長老さんをお附け下さいませし。

尼

殊勝な志しぢや。目蓮、おまひ、一しよに往つておやりなさい。かしこまりました。

淨

ト文句の通り、釋迦に又阿難らに會釋して下手(まがげ)へ入る。阿難は、やはり、ちつと俯向いたまふでゐる。(ふと心附いた思ひ入れ) 製特！

釋

あゝの尼の、俗の時の衣裳が、あちらに取遺してあるであらう。持たせてやるのであつた。奥へ

目

いって、さがして、有つたら、這ひついて渡してくれ。ハイ。

淨

ハイ。

釋

ハイ。

製

ハイ。



阿

ト繁特は下手の出入り口へ入る。
途端に、うつむいてみた阿難は、急に釋迦の前へ走り進み、左の肩をぬき、右の膝を床に著けて、首禮し、又聲を揚げて泣きながら

わたくしに二つの魔障があるとおぼせられました。其一つだけは只今ヤツと合點がゆきました
が、なぜだか、わたくしには、道理では十分解つてをりましても、まだ何一つ……少女や繁特
すら證得しますのに、……今尙ほ羅漢果が得られませんが、どうしたわけでございますか？
どうしたら無爲を、無漏を、眞の道を證得することが出来るのでございませう？ 三年このか
た一心不亂に、一宵でも、お教へを承はり洩したことはございませぬ。どの御宣説も、疑らず、
結語してをります。古代の教へ、外道の教へ、異國の教へまでも考へ合せまして、お教への有
りがたさを人一倍知り盡してゐる積りでございすのに、どうしてあんなヤンダラ風情の取る
にも足りない邪法をすら破折することが出来なかつたのでございませう？ 二つあるとおつし
やいましたもう一つの魔障の故でございませうか？ 世尊さま、どうぞお慈悲に、此不肖な私
に、著摩他の路を御開示下さいまし！ 世尊さま、もう一つの魔障とは、何でございませう？
どういふ事でございますか？ どうぞお慈悲におをしへ下さいまし！
いや、まだ其機でない。今に自然に解るであらう。

釋

トいひつゝ釋迦は目をつぶつて、又も冥想に入らうとする。阿難は此機を逸してはといふ思ひ入れ。改めて三度首禮して

阿

世尊さま、お慈悲でございます。せめて其魔障の右目だけでも……
トいひあける。釋迦は目を開き、右の手を掲げてそれを遮り
おまはは、多寶でもあり、其時でもある。それをわしに聞かすとも、今に自然に開悟する時が



十方世界隈もなく、かゞよび照らす大日輪や大法輪、先づ天竺に、もろこしに、高麗
に、やまごに、とことばに、輻りはじめの物語り

ト東方の窓から旭の光りが射し入る。同時に、阿難はハッと頓悟した思ひ入れ、振仰いで釋迦の顔を見る。ト釋迦
は微笑に笑む。それを見て阿難は目を輝かし、法悦に浸つた思ひ入れ、合掌して釋迦を禮拜する。
ト舞臺一ぱい旭光が輝きわたる。微妙な音楽の聲のうちに

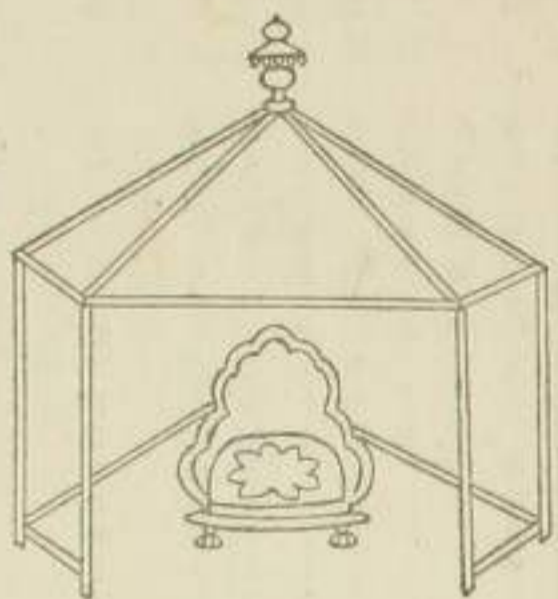
幕

思子母經院



思子母院





敷人を産み、もはや五百人の子種を儲けられてござるところ、近年は乳汁が不足し、乳離れめさるまでの養ひの料が足りませぬ。それを補はうとあって、怖ろしや、去年このかた、日毎に市の者共の嬰兒を盗み取り、其生息血を絞り、子種の養ひとせられまするによつて、やがては此あたりに、世継ぎの人だねが盡き果てうと存する。

市一

これは、河一つあなただの、王舎城と申す都に、曾祖父の代から住みなれた者でござるが、妻多夜又どの、息女カリテイ母どの、面こそ天人なれ、心ざまは生得の鬼女でござつて、今より十餘年の昔、ケンダラ國の半支迦夜又どのと御縁組なされ、月毎に近い古代印度の服裝、皮膚の色、男は多少鬚をまぜた遺いトノコ、女は黄白粉。

附くることあり。上手に、一本の石榴の立ち木（ネリダン）、初めに、實の附いてゐない小枝を、後に、實の附いてゐる枝を折取ることがある。

幕があくと、下手の揚げ幕から、王舎城の市人の一と其妻とが出る。妻は懐らに赤子を抱いてゐる。二人とも半裸體に、



153401537

市二 この上もない事。なるほど、その外には、又とせんすべもあるまい。(ト妻に向ひ)何と、こゝにゐてお籠りして見うではないか?

二妻 なか。それがようおじやりませう。……此うち二の妻の懐る子笑く。

オ、たがよ。……トあやすが、中々泣きやまない。

一妻 こゝによい物がおじやる。(ト先期の小枝をふり動かして見せ)ソレ、金ちゃく。トあやすが、懐る子泣きやむ。このうち二同よろしく立木の蔭に住ふ。トすく頃となる。

「妙なる法の御車の、たへなる法のみくるまの、轍は世々に残らむ。ありがたや、はて知らぬ生死の海に没溺し、五欲の關にさまよへる、衆生を濟度のおん誓ひ。大聖世尊釋迦如來、三迦葉をおん侶に、けふも日ねもす行鉢の御教化果て、安詳と古祥林を名にし負ふ、假阿蘭若に著きたまふ。

ト「御教化果て」のガ、リで、向う掲げ幕から釋迦如來、左の手にて木蘭色の僧衣の端を捧げ持ち、右の手に錫杖を突き、頸から胸へ水晶の數珠を掛け、しづくと出る。齡は五十以上。皮膚は黄金色。裸足。

「古祥林を云々」のガ、リで、三迦葉出る。眞先きが、ウルビシラ迦葉(こゝに老迦葉と略稱しておく)、六十歳以上。第二が伽耶迦葉、四十五六歳。第三が那提迦葉、三十七八歳。いづれも左の手に木蘭子の數珠を掛けて、僧衣の端を捧げ持ち、右の手に普通の大ききの錫杖を持つてゐる。錫杖は無し。いづれも裸足。「著きたまふ」と唄ひ初るまでに、釋迦は花道の七三まで来て、立ちどまり、餘かに挨拶する。ト三迦葉も立ちどまり、すぐ踵いて敬禮する。



釋 三迦葉よ、カリテイ母が強悪は、聞き傳へしにいやましたり。是れしかしながら、其前生、牛飼ひをうなたりして、立てし惡願の業果にして、是非なくも兒女となれるなれば、いたまはしは現れが現身。

老迦 こは、かたじけなき御懷念にて候ふ。面は人、心は鬼畜のふるまひなれども、前世の宿業と承

伽耶 是れば、さすがに哀れとも覺え候ふ。アイヤ、教勸さるることに候へども、又となきいとし子をば、彼女の爲に、無慚にも取られつる、親々の心はさふらふ。既に失はれし種兒のみにて、はや數千百人に及ぶとかや。かくて

那提 年を経候はんには、王舍城下はいふに及ばず、このマガダ國に人だね盡き、一團の荒蕪とや化し申さん。

老迦 けに。汝らが懸へ申すことも事わりなり。あはれ、世尊、おん大慈悲を垂れさせられ、一殺多生の御方便をこそ……

伽耶 ひとへに願はしう……三人 存じ候へ。

唄へ申しあぐれば、ほゝゑみたまひ。釋 其心づかひ無用なり。仔細はやがて物語らん。

唄へ勸と共に御假屋の、椅子にしづかに倚りたまへば、市人どもは出で迎へ、畏まりつつ、聲々に

ト釋迦は假屋に入りて、半結跏式に膝をおろす。三迦葉は其左右に侍立する。

老迦 ヤアラ、槃陀伽どの、世尊、最前より本持らね。
伽耶 おん仰せ附けの……
三人 首尾はいかに？

槃陀伽 さん候ふ、仰せ附けの如く、カリテイ母が愛見、アイヌ童子を、まッこの如く、取りおぼせて
齧つたり。いで、先づ、世尊のおん目にかけん……
ト座の裏を取りのけ、鉢のまゝ、釋迦の前へ持つてゆく。ト人形はげしく泣く。
オ、たがよ……

トあやすが、中々泣きやまないいで、もてあます。
やよ、那提よ、それなる吉祥果を摘み取り、赤き實の汁をたらうべさせよ。たちどころに泣きや
まん。

那提 はッア。

ト那提、立ち木の石欄の枝を、實の二箇ほど附いてゐるのを、折り取り、其實の二つより赤き粒を若干摘みて汁を
絞ることなしありて、人形に飲ます仕事。ト忽ち泣きやむ。

那提 あら、不思議や！ たちまち泣きやみ候うて、此赤き粒の汁を、乳汁の如くに飲み候ふ。
さもあらん。日ごろたべ慣れし人肉に、味ひ似たる吉祥果、嗜むもことわり。……やよ、槃陀伽、
さて、カリテイ母が、其後はいかに？

さん候ふ、勅の通り、錫杖に、具多羅を結び附け、其面に黒々と、「己れの好まぬ事をば他にも
すな、自らの子がいとほしくば、他の子をもいさほしめ」と書きしるし、戴しとめて俯へば、
腹もと下手を世尊と繋り、取り返つて、涙なくこれへ
聞あせせや、人衆、物音



市一 アレ、向うへカリテイ母どのが、黒髪を振りみだし……
市二 さ、へうとする首陀羅たちを、投げとばし、打ちのめし……
一妻 なう、おそろしや、さながらの鬼女となつて……
二妻 アレ、こなたへ、荒れ狂うて念られまする。
市一 どなたも御用心さッしやりませい。
市二 なう、おそろしや……

トうろたへる。伽耶、那提、座を立ち、市人らを制し、よろしく向うへ思ひ入れ。
……へ子ゆゑにぞ、阿修羅と荒るゝ親ごころ、吐く息はのはの如くなり

ト首陀羅（カリテイ母に使はれてゐる黒奴）の一人が、カリテイ母に投げとばされたといふ心で、掲げ幕から駆け
出してくるや否や、花道の中ほどで、見事にトンガを切る。黒奴は、次ぎに出る他の一人も共に、頭部と腰部とだ
けに白き布を纏ひ、餘は裸體。背後に短い木剣をぶら下げてゐる。

唄へど々むる首陀羅を右ひだり、前に、うしろに、投げのけ、打ち伏せ、ふみにじり

ト此文句のカーリで、カリテイ母、豪家の女主人公といふことしらへ、金モールで膝を取り、金銀箔にて花鳥模様を
置いた雪白の輕羅を、上半身は肌もあらはに、著て、淡紫色の裳を穿ち、なかば解けて振盪した古代印度式の束髪
の前頭部又後頭部に、金、銀、珠玉の飾り、胸や手首にも同じく飾り、額にも寶石を嵌入した金の飾り——それが

一つの目のやうにも見える。――齡は三五六、皮膚の色は乳白だが、柳眉は逆立ち、目尻は釣り上り、眉の間に
はみそらしい八の字が青々と目立つので、さながら半鬼女の形相。十本の指の尖にも又掌にも紅をさし、足は裸
し。手には貝多羅の一片に、梵字にて、前記の「己れの好まぬ事をば、云々」の語を書き附け、結び垂れてある錫
杖を持ち、それを棒か鞭刀かのやうに打揮つて、さへへようとする二人の黒奴を逐ひのけ、立廻つて、厭けて
出る。尚ほ其背後に、古風な短剣を革紐で吊り下げてゐる。ト、二人のうちの一人を足下にふまへ、キッと鎌倉
を見て

カリ オ、あれこそは吉祥林！ 寶僧めにいかなる神通のあらばあれ、われにも具はる業通あり。

唄へ 荒れに荒れてぞへ駆け來たる

ト二人の黒奴を、或ひは突きつけ、或ひは打拂ひ、いろ／＼あつて、本陣へくる。ト、黒奴二人は逐ひのけら
れ、後見座近くへさがり、見物に背を向けて控へる。

カリ (釋迦に向ひ、振勢をして) やい、おのれこそ、噂に聞いた聖僧めよな！ 何とてわがいとし子をば
盗みつるぞ？ いや、知らぬとは、えやは言はせじ！ 置き忘れし此錫杖がのがれぬあかし。
いざ、速かにわが子を返せ。返さずば、目に物見せうす！

唄へ 躍りかゝるを遮る兄弟



カリ (地軸をふみつゝ) おぞや！ 親の心をえ知らぬ寶僧め！ 汝が取りしはわが末子！ 末は取
りわけ (トいひかけて、急に胸のせまつた思ひ入れ) かはゆきものを！

トこらへかねて、只の母親のやうになり泣く。
かはゆき子の命はをしいか？ 汝が非道の報いによつて、不便なれども、彼れが命は、はや終
りぬ、と、言はゞいかだ！

カリ ヤッ！ おのれ、わが末を殺せしとや！
ト驚きて、おぼえず、手に持つてゐた錫杖を取り落す。

釋 その貝多羅の文字を讀ますや？ 「己れの好まぬ事をば他にすな、自らの子がいとほしくば、
他の子をもいとほしめ。」そのことわりを知らぬ汝、非道の報いと思ひ知れや！

カリ すりや、わが子をば殺せしとや？ 殺せしとや？ エ、何とせん、何とせん、悲しや、悲し
や！ 何とせん、何とせん！ (トいら／＼に悶え悲しみ、狂氣の如く、歎き狂ふことありて、トマキツとなり)
おのれ、わが子の敵！

唄へ 剣きらりと飛びかゝれど

ト背に負うてゐた短剣を抜き、釋迦を目掛けて飛びかゝらうとする。ト釋迦、膝靡の印を結びて、呪文を唱へる。

唄へ妙用不思議の神呪の威力、さすがの鬼女も、たちくく、眼くらみ、伏しまろび

ト文句の通りありて

カリ エ、無念！ くちをしや！

唄へ無念々々と哭き叫ぶ

トもがくこと。老道婆らをのく鍋杖をおつとつて、左右よりキツとおさへつくる。

釋 いかにも、カリテイ、故五百人の子を持ちながら、只一人を失うてだに、さばかりに悲しみ狂ふ。又となき一人子を、故の爲に殺されつる、幾千人の親々の、其悲しみを思ひ知らずや！ 強忍の報いのがれがたく、今や故は生きながら、鬼畜界に墮したんぬ。連かに後悔して、わが教誡に随順し、彌那三師の誡を示さば、故が未アイエ童子を、生かし返さんのみならず、種もりし罪を消除して、須陀涅槃を證得させ、善女神ともならしめんが、否といはど、残れる四百九十九兒をも、今立ちどころに妻に引き寄せ、わが神通を以て、母子の縁を斷絶せん。返答せよや、カリテイ母！

此長せりフの間、カリテイ母は老道婆らに鍋杖にておさへられながら、見物をうしろにし、剣を構へ、片膝を立て、聞く言毎に、身をふるはして怒るこなし。ト三遊業を這ひのけ、釋迦の方へ機勢をしつゝ、(其間に親の中央に一本の角の生えてゐる鬼女の假面をかぶり、セリツが終はると、向き直つてキツとなり、齒噛みをしつゝ)

カリ いふな、賣僧！ 汝如きの御通力にて、われを鬼畜に落せりなどは！ 母子の縁を斷たんな

どとは！ いつはにも親と死なれ！ おのれ、思ひ知らせてくれん！

唄へまた立ちかゝる折しもあれ

上節のしきたりとなりて、それを這る三遊業を拂ひのけ、釋迦に問かばりとして暫く強く立廻ること。其時、



唄へ母のあと追ふをさな子ら、七つを頭に數十人

子方 母さまイなりく！

侍女 奥方さまイなりく！

唄へ腰元もろとも走りくる

ト子方四人(四五十人のシムボル)、七歳位の男女兒おのく一人、五歳位の男女兒、おのく一人、別に侍女三人、いづれも半裸體式の輕裝、但し養族の子供、侍女の扮裝。侍女は三人とも十七八歳、其うち二人はカリテイ母の末の娘の嬰兒を一人づつ抱き、残る一人は椅子を持ち、子方四人と入りまじりになって、揚げ幕から駆け出て、すぐ本舞臺へ掛かる。カリテイ母は、それを見て、只の母親に戻り、懐かしげに走り迎へて

カリ オ、和子達か？ 母はこゝに！ こゝに！

唄へ近寄ればツツと逃げ

子方 アレイ！ こはい！ こはい！ 母さまではない！ こはい！

と子方逃げる。侍女らへ近寄ると、嬰兒(人形)が突き出す。侍女らも怖れる。ト一回舞臺の上手へ逃げる。カリテイ母追ひ廻る。ト三遊業が廻る。

カリ えい、何をわッけもない！ コレ、わしチャ！ 母チャ！ 母チャ！

ト三遊業と又一寸立ちまはり、入れかはる。ト子方ら、侍女ら、又下手へ逃げる。

子方 イエ、母さまではない！こはいく！

唄へ 呆れ果てたるばかりなり

ト追ひくたびれて、カリテイ母は、舞臺の中央に立ちすくみになる。

釋 見よや、カリテイ！わが言ひしに露たがはず、故鬼畜に身を墮したれば、母子一世の縁切れ

て、實の子らだに怖れをのよく。是は、汝が面を、其劍刃に映して見よ。

唄へ おほせに、おほえす、劍に面

ト劍の刃にわが顔を映して見て

カリ ヤ、この怖ろしい面は何者？

トうしろを見たり、左右を見廻はしたりすることありて

唄へ しばし我れ敷をわかねしが

トヤがて、それがわが顔であることを知ると

カリ オ、さては、これがわが相よ！……あら、あさましや！はづかしや！

唄きぬ 引きかづき、泣きのたり

ト蓮物を頭から引きかぶり、見物に背をむけ、俯伏しになりて泣く。以下、セリフ、仕草いろいろある間に、鬼女の假面をぬぎ、化粧を仕直すことあり。



三迦葉 かじこまつて候ふ。

ト四人座を立ち、めい／＼數珠を持ち、舞臺の正面に並び立ち、次ぎの和讃めく唄につれて、緩やかな振事。（これもカリテイ母が化粧を仕直す間のツナギである。）

唄へ あはれ、極悪の行ひも、悔ゆれば轉た微薄なり、百年経たる古衣も、洗はば、心の

眞清水に、いかでか無垢とならざらん、懺悔は慧日、罪は露霜、懺悔は火炎、迷ひは

薪、よしや罪業深くとも、今より五戒を保ちつゝ、懺悔のまごころ徹到せば、天路往

生うたがひなし、懺悔に雨るや寶摩尼珠、懺悔に聞くや菩提の華、あら、ありがたの

懺悔やな、懺悔々々の妙功德

ト（磬、鏡、鉢、木魚、銅鑼等の寺樂を下座にて奏することあり）よろしく舞ひ收めると、皆々揃つて又もと

の居どこへ戻りて住ふ。此間に化粧の仕直しを済したカリテイ母は、尙ほ薄きぬをかまつたまふで、恭しく釋迦を

禮拜し

カリ あら、あさましや！おそろしや！量り知られぬわがけふまでの罪業を、今こそ思ひ知りて

候へ。救はせたまへ、大聖尊！助けたまへ、釋迦牟尼如来！……（ト此途端、侍女二人が抱いてあ

る二嬰兒、火の附いたやうに突き出す。）オ、！（トおぼえず、哭く子のはうへ駆け行かうとしたが、たゆたひ、忽

ち聲を擧げて泣き）さはさりながら、悲しやなア！

唄へまだ乳離れせぬ木のみどり見幾十人、何を飲ませて養はん
 カリ 生中人の血汐をば飲みならはし、報いは腹面！
 唄へ飢えじにさすか、あさましや、身を揉み悶え、悲しめば
 釋 な歎きそよ、カリタイ母、人の血肉は用ひずとも、子を養はん術はあり。すがて我れ汝に教へん。さもあれ、故、今よりして、堅く五戒を守るや、いかに！ 不姪、不姪、不殺生。此三戒を守るや、いかに！ 兩舌、飲酒を断つやいかに！
 カリ オ、その五戒はおろかな事、いかなる難苦の戒律をも、誓つて守り候ふべし。只願はくは、世尊如来、此鬼畜の境界を、此孤獨のあさましさを、救はせたまへ！ 助けたまへ！
 釋 上聲をあげて笑く。
 カリ 善哉善哉！ 汝が懺悔のまごころ見えたり。いで、さらば、見すべきものあり。近う！
 カリ ハ、ア！
 唄へ膝進むれど、罪科の、心に重き薄きぬを、尙ほ脱ぎかねて、たゆたへば
 釋 カリタイ母はやく前へ進みはしたが、かぶつてゐる毒物を尙ほぬきかねてゐる。ト釋迦、聖院側を見返りソレ、その鐵鉢を

トこれにて聖院側、蓮の葉をかぶせたまふ、アイヌ童子の腹かしてある鐵鉢をカリタイ母の前へ持ちゆきて据ゑる。カリタイ母は、何心なく、蓮の葉を取りのけて、見て、ハッと驚き



釋 それぞ即ち味ひも、又養ひもさながらに、小兒の血肉にひとしき果實、其實を絞りと、與へて見よ。
 トこれにてカリタイ母、石榴の赤き粒を絞りとてアイヌに飲ます仕草あり、赤子哭き止む。ト石榴の枝を押し置き、嬉しげに釋迦を禮拜する。
 懺悔の功德いらしむく、はや鬼畜界を脱せしのみか、女菩薩ともなり得ん哉。……やよ、那提よ、彼女が腹ひを取りすて、自餘の子らにも引き合せよ。
 那提 ハ、ア！
 ト那提、カリタイ母のかぶつてゐる薄きぬを取りのける。ト泉女の面とも又初めの出の顔色とも全く別の増嚴殊麗の天女と見える相好。で、上手に控へてゐた四人の子方はこれを見て、一齊に立ち上り、聲を加へて
 子四 ヤア！ 母さまッ！
 上駆け寄り、左右からカリタイ母に觸る。同時に侍女三人も、二人は嬰兒を抱き、一人は拂子を持ち、其傍らへ進む。
 カリ オ、和子たちか！……
 ト喜ぶ仕草よろしくありて、ト
 すりや、最前の形相は！……
 ト落ちてゐる以前の顔を取りあげて、又其顔を映して見て
 オ、……

ト騒ぎ、喜び

唄へあら、ありがたの佛恩やな、何を以てか類ひなき、此大慈恩に報ゆべき

ト三匠して、釋迦を禮拜し

唄へ何を以てか怖ろしき、わが積悪を償はん

ト坐ったまふで振、トッ拂子を持つてゐる侍女へこなし。侍女が進むと、アイヌ童子と石榴の枝とを渡し、代りに拂子を受け取りて、立上り

唄へいで、さらば、あまねく世々の、國々の、男をみな守り神、いみじき妹脊の中々にも、思ふに任せぬ子寶を、祈らば授け、安らげ、産ませ、育たせ、いだき寝の

トよろしく振。「男をみな守り神」のカ、リで、嬰兒を抱いてゐる二人の侍女とト下手に控へてゐる黒奴へ「ここへ来い」といふこなし。黒奴二人が進むと、侍女らは抱いてゐた嬰兒をいよく黒奴へ渡す。さうして「いみじき妹脊の中々にも」以下、カリテイ母に絡みて、思ひ合つた新婚の男女といふ心にて、よろしく振。ヤがて、カリテイ母を禮拜して、子を授けたまへ、と祈る振。トッ、侍女の一人は退りて坐し、アイヌを抱いてゐる侍女が立つて入れ代り、カリテイ母の上手へ廻はり、他の一人は下手に立ち、暫時三人とも不動のポーズ。(挿繪(二)の如く、滿洲の子孫娘々と送子娘々と催生娘々の像の見得(日輪參照)。ト市人、二夫婦が前へ進み參詣人の心にて跪き、禮拜する振。



送子娘々の像



蓮華童子像



普賢菩薩像



女佛其上的位子及



女侍其之神母子鬼 (四)



相巽、相羅、夜、耶、夜半のまがごと忽ちに、碎けて消えて、跡は白波なごやかに

と此文句のオ、リで、侍女ら、黒奴二人へこなし。ト黒奴は、めい／＼、抱いてゐた嬰兒を侍女らへ返して、立上り、頭の白布にて顔を包むことありて、盜賊の思ひ入れ、背後の木剣を兎髯と見せ、暗き、或ひはうなづきて、人家へ忍び入ることなし。よき頃に、市人一、二の夫婦、其家のあるじ及び家人の思ひ入れにて、それを見つけ、驚く振、うろたへる振、賊に追はれ逃げ廻る振などありて、ト、冥助を祈ることなし。ト「夜半のまがごと、云々」のオ、リで、カリテイ母は前へ進み、黒奴二人を相手に一寸立廻はる。ト、黒奴二人は見事に反り、舞臺中央のオ、リ下手寄りに並んでうづくまる。トそれがちようどカリテイ母の腰を掛ける處になり、次ぎの文句一ぱいにカリテイ母を中心に、四人の子方と侍女三人とが、それ／＼よろしく住ひ、(挿圖(戌、巳)の如く)鬼子母神の畫像の見えにきまる。

頃、四海泰平、國土安樂、家々の、繁榮擁護ぞわが誓願

此間、市人一、二の夫婦は善しく合掌して禮拜してゐる。文句が切れると、カリテイ母はすぐ立つて、釋迦の前へ進み、改めて跪き拜をする。子方、侍女、黒奴らは下手へ退つて控へる。

カ、リ、南無、引接させたまへ、最勝大悲世尊如来!

頃へ導きたまへと願ひける

善哉、善哉! その大懺悔の誓願なくば、おことの子らは悉く鬼王となり、おことは鬼王の母な

れば、たゞ鬼子母とのみ呼ばれつらんに、翻邪三歸し、立ち處に、一切衆生利益の、女佛となれるぞ有りがたけれ。是れ併しながら三寶の奇特なり。さらば、人々、もろともに、法の不思議を讃歎せよ。

一 同 ハ、ア、ア、

頃へげに、不思議、御佛の、御法の本は只一つ、其御教へは無量なり、おほよそ八萬四千藏、其御身も無量にて、化益を被むる衆生も無量、國土も無量、劫無量

ト釋迦を三匠しつゝ、三迦葉、婆提伽、カリテイ母、其子供、其黒奴、市人、二の夫婦が、多少和讃、念佛式の曲に連れて、レキ、トまがひの舞踏をなし、次ぎの文句の力、リから、印度舞師風に二變する。

頃へきながら十方遍照の大日輪よ、無量光

ト釋迦は舞臺の中央に、此時、後見が持つて來て振ふる椅子の上に、結跏趺坐して、大日如來の見え。(挿圖(唐)參照)ト一同よろしく上下に別れて、跪きて禮拜する。ト次ぎの文句になり、琴、笙、琵琶、羯鼓、腰鼓、磬等の樂器を下座にて奏しはじめる。

頃へ瞻仰讚美の折しもや、紫雲たなびき、大空に、妙なる音樂、聲澄みわたり、異香薫じて降りかゝる、四種の華の間よりぞ、あまたの聖衆けざやかに、影向あるこそ尊け

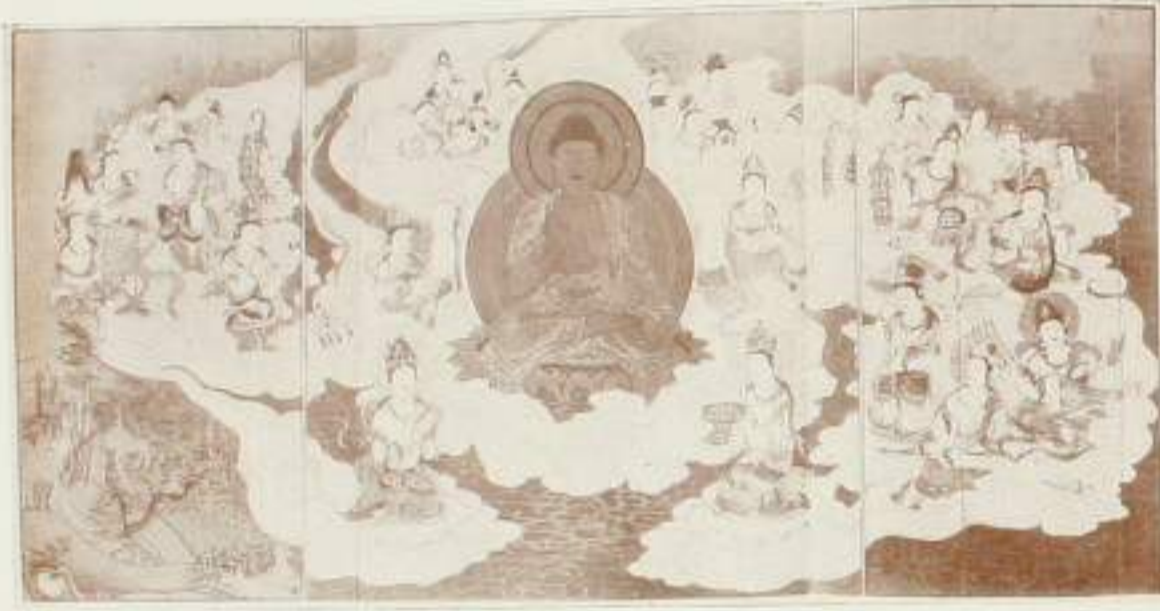
ト釋迦は椅子に坐つたが、但し其姿勢は佛の慧心尊嚴の、十五世釋迦の、阿耨陀佛の見え。(挿圖)ト一同同時に、リ、リ、リ、リ、ト、男女の子孫四人と共に舞臺の方角、前後に、來迎の舞臺に投じて、



大日如來佛



BUDDHA IN THE CLOUDS



圖四 迦來羅佛五十二 (佛)



よろして其の二道要五の餘餘餘は、
種御に同み、中央、
神、白、赤、紅の四種の蓮華が、
幕

幕



所錄
改作
馬
公
孫





所錄
改作
物二
本





人物の方
 正 榮 尼
 大 藏 卿
 大野修理ノ亮
 名古屋山三
 秀次の亡靈
 女の幽霊一、二
 女のわらは、腰元甲、乙、丙

舞臺は一面の平舞臺。正面、五間の間は、流の方腰所の心にて、一段高くなり、幕あきより幕ぎれまで、始終ごく短い目の御座をおろしておく。

平舞臺は、此上壇の間を中心、上と下とへ、ヤ、漏子形にハスに開かせて、大ぶすま。下手に出入りあり。ふすまの繪は、上、下とも桃山式に重いた庭園あたるの園春の景。満山、櫻の花盛り。遠く又近く、あちこちに豊臣家の定紋の附いた格好。櫻の枝々から張り渡した紅の組み紐には金鈴が附いてゐる體。

中央、よき處に大形の火鉢。上と下とに行燈。火鉢の上手に、虎、櫻の葉すまひ。下手に、腰元甲、乙、丙、三人一様に手を突いて言ひ附けを絶つてゐる。此櫻橋、雨車、風の音にて幕あき。

なう、皆の衆、いつもとちがひ、こよひはいかうお心よげに、サヤ／＼と御座なつた。此程よりの御心勞の、お蔭れのせむでもあらう。わしはお次ぎへ下りますが、子の刻までは、きつと

舞



宿直をしてをります親に、若しもおうなされ遊ばしたら、早う知らせて下さりませ。

甲 はい〜……

三人 かしこまりましてござりまする。

三人 お目ざはりならぬやう、ともし火を細うしておゝまなされませ。

三人 かしこまりました。

桐の葉下手のふすまをあけて入る。ト腰元どもは立ち、行燈の煙心へらす。舞臺うすぐらくなる。ト本約り。三人は火鉢の上、下へよろしく仕ふ。又、雨車、風の音。甲は御簾のうちへコナシありて、何かさゝやく。これにて乙、丙、ソツとした思ひ入れ、同じく何かさゝやくこなし。一かたまりとなりて、火鉢にあたる。薄ドロ。舞臺は更に昏くなる。そのうちに、三人とも居眠りをはじめる。薄ドロつづく。上壇の間の奥に、三味線の音が聞える。又、風の音。行燈が消える。ト平舞臺は殆ど眞つくらにたる。上壇の御簾の内がだん／＼明るくなる。(よまごころに、三味線を下座へ移し、明るくなり終はると同時に次ぎの唄になる。隆達節とでもいふやうな唄。)

唄 春風に、なびく青やぎ、それならで、さてもあてやか、黒髪、へあれを巻き、これを巻きゆさるゝ、へさてもさて、思うつ思はれつ身でもないもの、へおいごまたもれ、歸ろやれ、へしゃなら、しゃんならと



淀

唄が切れると共に、山三は畫面の見えにきまる。トすぐに手を突き、平伏し淀の方に向つて拜をする。淀の方は尙ほ盃を手持ったまゝで、うつとりとした思ひ入れで、おゝ、けふは一段とあさやか、あさやか！ おもしろいことであた。さ、さ、さ、こゝへ来て、ま、いつたべやいなう。

ト山三、だまつて平伏してゐる。

さ、こゝへ来て。ハテ、来やといふに。

ト山三は無言にて立ち上り、すゞぐりと向き直り、「能」のやうな足取りで、後幕の裏へ入りかゝる。淀の方不審さうに

ヨレ、山三！

ト呼ぶ。が、振返りもせず、幕の内へ姿を隠す。ト淀の方又呼ぶ。

山三！

ト薄ドロ。山三、幕の上へ首だけ出す。

山三！

ト上壇の間がだん／＼昏くなり、ドロ／＼がはげしくなる。先づ、櫻の枝や立ち木が消える。いつの間にか、山三の首が舞臺を振盪した關白秀次の顔に變り、次ぎのセリフになる。おのれ邪淫に耽りながら、われを邪淫と譏言せし、汝が嫉妬の毒舌に、われ太閤のにくしみ受

秀

淀

け、はかなく消えし榮華の夢、わればかりかは、御寮、いとし子、三十餘人、浮かばぬ鬼となつたる怨み、今にぞ思ひ知らせてくれん。此セリフのうち、後幕の二部がはづれ、亡霊の全身が現はれ、穂すゝきの生ひ茂つた青生塚の背景があらはなる。此間、淀の方よろしく思ひ入れ、こなしありて、ト

ト顔をそむけ、袖屏風をして

たそ居ぬか……正榮尼……大蔵卿！

ト呼ぶ。同時に後幕が全部消えて、一面の薄原と代る。「正榮尼」「大蔵卿」と呼ぶのにつれて、白衣を著た女の幽霊があらから出る。

幽一
幽二
こゝにをりまする！
こゝにをりまする！

大下ろ〜。あちこちに燭耐火。

秀

今にぞ思ひ知らせてくれん！

秀次の亡霊も、女の幽霊もどり〜と淀の方に近づく。(此以前、女のわらはは姿を消す。)淀の方驚き、逃げようとして腰の立たぬ思ひ入れ、こなし。今にぞ思ひ知らしてくれん！

淀の方もがく。脇息が倒れる。淀の方だけ誰かが、シカケにて、礎石に引かれるやうに逆立ち、秀次の方へ進む。

女の幽霊が左右から迫りて、いろ〜にさいなむ。淀の方くろしみ、ト懐刀を抜き、無言で切り舞ふ。大下ろ。御麻のうらが真〜くらになる。

ト平舞臺がだん〜と照明くなる。淀の方御麻の間から、懐刀を懸上げた態で、半身を現はす。ト三人に腰元三人



淀

オ、そなたは？

モシ、お心が附きましたか？ 梶の葉でござりまする。

そんなら、今のは……

エ、……コレ、腰元衆、何をうろ〜！ 早うお薬湯を。

ト甲の腰元下手へ入る。乙と丙はボンボリの火を行燈へ移す。舞臺あかるくなる。

乙、丙

かしこまりました。

ト乙、丙は二重の御麻内へ入り、両、脇息、裾等を持って来て、よき處へ振ふる。梶の葉は淀の方を介抱して籠を著せることなどある。此時、甲が薬湯を持って来て淀の方に飲ませる。梶の葉「次ぎへ立て」と腰元共へこなし、

三人とも會釋して下手へ入る。淀の方やつとわれに歸りたる思ひ入れ。夢は五臓の疲れといへど、まさ〜と見た青生塚。

エ、……

サ、畜生やら、變化やら、群り來つると覚えしまふ、われを忘れて懐る刀、ぬき放ちしは現であつたか！

ト梶の葉よろしく思ひ入れ。

梶 從 梶 從 梶 從 梶 從 甲 從 甲 從 梶 從

お家のゆく末、とやかくと、御心勞のけふ此ごろ。おん夢ごちの安からぬも、御尤もでござりまする。とは申せ、聽じてお夢は違さまとやら。必ずお案じ遊ばしまするな。

ト背をさすること。此時、時計の音。

もうよい、もうよい！ さ、さ、早うさがって休んだがよい。

では御疑所へお移り遊ばせ。御案内いたしませう。

ト立ちかゝる。

みづからには氣づかひ無用。早うさがりや。

それではあんまり……

ハテ、かまやんなといふに。

ト強くいふ。

ハ、ア！

ト是非なく立って下手へ入る。それと入りちがひに、腰元甲が出て

申し上げまする。けさ程の密事につき、正榮尼、大藏卿の局、参入なされてござりまする。

これへ通しや。

ハア！

ト下手へ入る。從の方だん／＼心の落ち附いた體。ふすまの繪をおつと見つめ

あの繪だすまを見るにつけ、思ひぞいづる過ぎこしかた。とりわけ醍醐の櫻狩り。いで、その

ころは、みづからも、盛りの花々を深き、東樂殿の榮華の夢。われ一たび笑む時は、布衣より

綴つて天が下、六十餘州を榮耀ざりし、木蘭も、ア、ア、笑、笑とさめく諸大名も、皆み

づかぬを憐りの、興とささるる豊臣の、世は泰平よと思ひの外、さんねる三年の秋の風、細み

に思ひし治部が輔も、小西も共に木枯しの、忘れずもびのく木の下かけ。

ト聲ひのこなし、とま、風は吹くことありて

に、くまは油川家康、御遺言を反古となし、秀頼が幼穉を幸ひ、みづからを女と侮り、大御殿

建立を停止とは……

ト怒り

其分疏をせよとは何事！……世が世なら家の子同然の陪臣に……

ト又怒り

エ、武運も末となつたるか！ ひきつづく不祥といひ、今まさ／＼と見たる夢……もしや無常

に世を去りし……

ト背ひかけてゾツとした思ひ入れ。

心にかゝることぢやなす。

ト此時、下手の襖をあげて正榮尼(七十以上)ボンボリを持ちて先きに、大藏卿(六十以上)出る。

オ、待ちかねしぞ二人の者、今朝方は人目の偉り、聞き流せし關東のおとづれ。一大事の訴

訟とは心がかかりぢや。早う仔細を聞かせてたも。

トこれにて二人はあたりへ思ひ入れあつて

恐れながら、當御城内に、油川家へ内通なし、ふた心を抱く、錦子身中の蟲がござりまする。

ナニ、内通の者ありとや！ シテ、其者は！

お家の執事、片桐市ノ正にござりまする。

何といやる！

おん驚きはお道理至極。日頃當城の柱石とも、思し召す市ノ正、かゝる企てあるべしとは、心

正 從 大 從 正

大 從

許さぬ私共さへ、神ならぬ身の多いさゝか。けに測られぬは人の心の裏おもて。
すなはち此たびの密事一切、御めおきましたる此一通。何とぞ御覽下されませう。
思ひがけぬ言葉のはし／＼。何にもせよ、ともしびこれへ。
ト一通を受取り、封を切る。正徳尼ボンガリを差出す。從の方くり返し、讀むことありて
ナ、片桐市ノ正が……
ト二人に向ひて

アノ自らをば、江戸表へ、人質として下すべしと、誓紙血判までなしたりとヤ！
さやうにござります。其證據の明細は……
尙ほその末文に、認めおきましてござりまする。

從の方讀みながら
ナ、三ヶ條の難題とは……
ト文章を讀む口調にて

「秀頼どの要害の地に居城あるゆゑ、世上の難説止む時なく、天下動亂のもとゐとなれば、暫
く大阪をお開きあつて、大和ノ國郡山か、又は其他の望みの處へ……」
ト讀みまして

エ、秀頼を所替へとは慮外千萬！
ト又讀む思ひ入れ。



二人 從

へ參勤にも及ぶまいから……そのやうに立歸つて勤めいと申したか？
さやうにござりまする。

エ、おのれ、たがいひつけて共沙汰。下として上を計る無禮者めが！
ト向うを睨みて怒りの思ひ入れ。

其お腹立ちは御尤もでござりまする。恐れ多くも右大臣家のおん母君を、囚人同然の人質など
とは、無念の涙がこぼれまする。

まことしからぬ事なれども、私共腰府に滞在中、聞くともなしに承はれば、從さま御下向遊ば
さば、片桐どのもお取持にて、大御所さまのお手かけに、ならせらるゝ、などゝ慮外の取沙汰。
申すことにも事をかき、家康づれが手かけとは！
ト憤激の思ひ入れ。

時世とはいひながら、日本六十餘州を切り従へ、威を大明までも振はれし、太閤どのに見えし
すら、くちをしいと思つたに……
ト怒り歎きて、ト取り亂して泣く。正徳尼、大藏卿も共に泣くことよろしく。

此時下手の顔をあけて大野修理ノ亮（三十七八）入り來り、下手に住ひて
ハッ、大切なる火急の旨上、推參平に御ゆるし……
トいひかけて

ヤ、御ッ方をはじめ、御一同の此體は？

徒 修 徒 修 大 修 大 正

オ、修理ノ亮か？ 心外ぢやわいなう！
ト哀訴するやうに言ふ。

とはまた、如何なる御事あつてか？ そも何故の御怒歎？
トずつと指り寄る。馴々しきこなし。

なう、不忠不義の市ノ正が、自らをば人質に、關東へ渡さうとするといなう！
ト泣きながらいふ。

スリ、市ノ正が不忠の段々、母大藏よりお聞取り遊ばしましたか？
トいつて心附き、やゝ形を改めて

正榮尼より言上ありしか？ 御立腹はお道理千萬！
イヤナ、修理ノ亮、あわたましげなる参入は心ばかり。火急のお知らせとは何事なるぞ？

只今京都より早打の知らせ。二條城の板倉伊賀、何か市ノ正と謀し合せ、一軍を引率なし、近
近いづこへか出陣の手筈、と聞者の口上。御用意なくては叶ふべからず。

すはこそおん大事でござりまする。此上は片時も早う軍の手配り。
ア、コレ、あわてまい大藏卿。

ト修理に向ひ
合點のゆかぬ其お知らせ。今、軍騒ぎせうほどなら、とかうの機嫌はいらぬ筈。いふまでもな
くそれは難説。立騒ぐには及びませぬ。折も折、修理ノ亮どの、ちとお氣をお付けなされませ

是れは、大藏卿としき事ひ入れ、
又しても正榮尼どのの落着き、もし明日は、あの大事



大 修 徒 修 大 修 大 正

御前さまの、アノお機嫌が……
トいひかける。

イエ、たど御不例の折ぢやとて、一大事は一大事。お家の安危にかゝはる上は、言ふは
忠義、いはぬは不忠。おのが心に引きくらべ、男まさりの御前さまをば、只の女子にしてのけ
ます。

ト是れにて正榮尼もムツとした體にて、膝を進めようとする。

ア、コレ、母上、何事も御方さまの御意次第。只今申し上げし儀を假に虚説ともいたせ、市
ノ正は不敵の曲者。いたづらに時を過さば、虚説も或ひは實となるべし。こゝが一大事の瀬戸
でござる。萬全の計りごとは、すぐさま七組に御説あつて、お召捕りあるべきにや？ 御賢慮
いかゞにござりまする。

ト徒の方の氣色を窺ひながらいふ。此以前、徒の方だん／＼おちつき、感懐を察ふることありて

正榮尼が申す如く、たかゞ且元一人、何程の事があらうぞ？ 手配りなどせば却つて騒動。不
斷の通り登城させ、きつと札明の上、處分なさん。

仰せでござりますれど、好智にたけたる彼れが辯才、出仕をお許しあらば、日ごろ同腹の織
田どのはじめ……

徒黨の者と謀し合せ、何爲出ださんもはかられませぬ。
只運かにお召捕り、其上にて御札明遊ばすこそ、萬全かと存じまする。

從 大 旋
 たへ富妻部の辯舌を以て、秀頼どのを欺くとも、みづからは欺かれぬ。其悪念は無用であら
 シぞ。
 むはござりますれど、萬に一つ、市ノ正が申し候、右府さまのお氣に召さば……
 エ、くどい……秀頼はみづからが子ちゃ！
 トきつといふ。此様様よろしく、合方、風の言にて

幕



阿難と鬼子母(終)

書物展望社 特定版
 五百部内 第七拾號



母子鬼と難阿



昭和九年六月九日印刷昭和九年六月
 十四日限定五百部刊行・著作者静岡
 縣熱海町坪内道遙・刊行者東京市京
 橋區新富町三ノ七岩本和三郎・印刷
 者東京市京橋區築地一ノ六土井儀二郎
 製本者 中村重義・發賣所 東京堂・
 發行所東京市京橋區新富町三ノ七

書物屋堂社
 價金五圓





